

ルーテル教会
キリスト教信仰へのガイド

～愛と恐れと信頼と～

石居正己著



日本福音ルーテル教会

この書を用いてくださるために

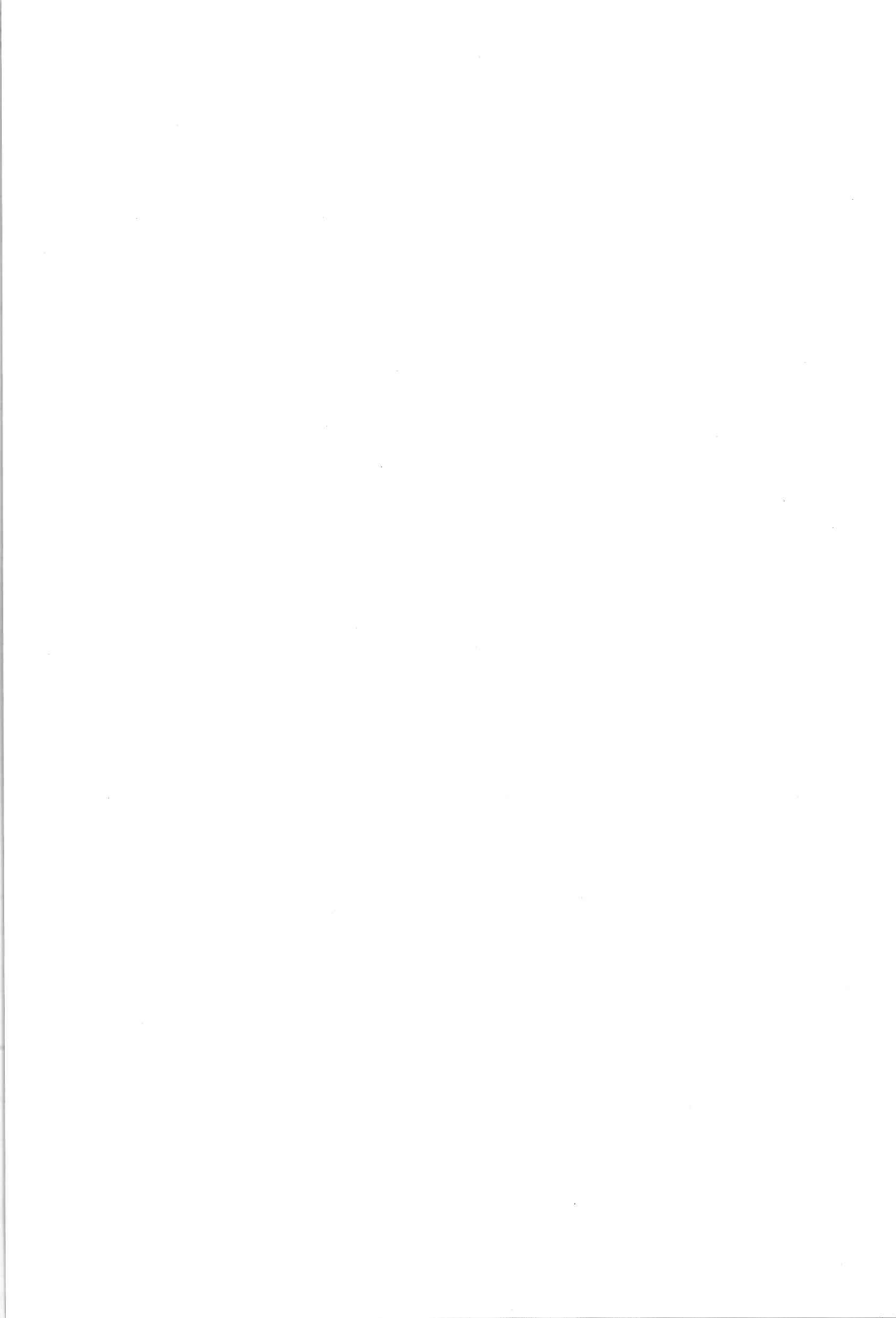
今からもう20年近くも前に、東教区で「キリスト教基礎講座」として、ほとんど手作り発行の「愛と恐れと信頼と」（第一集）が、幸いに要望があって新版を出すことになりました。内容的には最小限度に手を入れるのにとどめ、一定の頁に納まるように留意しました。

これは、求道者の人たちと、ルターの小教理問答書を学ぶときの参考にして頂くつもりで書かれています。ただ、教理問答書の順序に従ってはおりません。むしろまずキリスト教信仰についての基本的な課題について、知っておいて頂くことが必要だろうと考えたからです。

教理問答書の学びには、いろいろな角度からの入り方があります。ここに提示したのは、一つの示唆であって、これに限ったことではありません。項目を適宜、飛び飛びに見てくださっても、教理問答書にしたがって部分的に選択してくださっても結構です。また信仰の学びには、同じ問題をいろいろな経験や知識をもった後にも、繰り返し取り組むことが必要になってきます。初めから順番に進んでこの所まではすんだというようなわけにはゆきません。したがって、第二集でもまた取り上げる主題もあります。また同様に、たとえ信徒として長年過ごして来た方でも、その程度に応じて、同じ課題を振り返ってみることも必要となります。その意味では、ただ信仰の初心者というだけでなく、すべての人が基本的な学びを繰り返すことも大切です。

ルター自身、「自分もひとりの博士であり、説教者であって、学問もあり、経験も積んでいるつもりだ。それにも関わらず、私のしていることは教理問答を教わっている子供と同じで、朝ごとに、そして時間があるごとに、主の祈り、十戒、使徒信条、詩篇などを一語一語読み、また唱えているのである。そしてなおも続けて毎日読み、研究していかねばならない」と言っています。また礼拝をよりよく守るためにも、適切な教理問答がなくてはならないとも言います。

そのような意味で、これが信仰に進み、それを深め、確かめるために少しでもお役に立つことができればと願っています。



(1) 私たちにとっての神の問題

神を知らぬ者は心に言う「神などない」と。(詩編14:1)

主よ、わたしはなお、あなたに信頼し「あなたこそわたしの神」と申します。(詩編31:15)

ひとりの神をもつとは、どういう意味なのか。あるいは神とは何であるのか。

答え。ひとりの神とは、人間がいっさいのよいものを期待すべきかた、あらゆる困難にさいして避け所とすべきかたである。

(ルター・大教理問答書)

人の求める神か、 人を求める神か

科学的な知識が進んでいろいろな謎を解き、むかしは不思議とされていた諸現象の原因結果を説明してくれるようになってみると、だんだん神さまの居場所が失われてきているかのように感じられないでもありません。ところが他方、人はいつも宗教的なものを求めていて、形は変わっても神さまらしきものをたずね求めます。初詣ではたくさんの人が出かけ、星占いを気にしたりしています。「かなわぬ時の神頼み」で、困ったときには、相手をよくたしかめもしないで、飛びついたりします。私たちが勝手に描きだし、造りあげる神の姿は、次々に消えてはまた現われてきます。人間の中には、神的なものを求めないでは安心できない気持ちがあるのです。しかし、聖書は逆に私たちを求めてくださる神を示しています。人の思いをこえて、自らを現し、私たちの人生の意義を示し、私たちに語りかけ、私たちと共にいてくださるお方としての神を示すのです。

神はあるのか

神はあるとか、ないとか言っても、それはほんとうの神ご自身の存在に関わりないことかもしれない。というのは、「神がある」「ない」と言うとき、私たちはすでに神さまとはこういうものだと決めてかかっている、そうであるべきだと考えています。けれどもそれがほんとうの神にあてはまるかどうか、わかってはいないからです。

初めに引いたルターの大教理問答書の中の言葉は、だれもが、すでに神をもっていることを前提としています。そこに言われているような意味での神の座は、だれでも持っています。時には金や財産が、あるいは理性が、また名誉や欲が、そこに据えられているかもしれません。預言者イザヤは、人が自分のために働いてくれる神を、自分が自由に用いることのできる材料で造りだして、宗教心を満足させようとしたり、自分の望みを保証してもらうことができるかのように振る舞っていることをからかっています。しかし、ほんとうに力ある真実な神さまを、そのように考えたり、人が考えだし、造りだしたものをたしかな避け所とすることはできません。

イザヤ44・12～17参照

十戒は出エジプト記
20章参照

ヤコブ2・19参照

「あなたはいかなる像も造ってはならない」と十戒は命じています。きざんだり、描いたりした像だけでなく、勝手な理解や想像、期待の中で、神とはこういうものだというイメージを造りあげ、それを基として考えるのも間違いです。また神の存在を認めるということだけなら、それは信仰とは違う心構えであり、実はそのような仕方では存在を認めることすらできないでしょう。「わたしはある」（出エジプト3・

14) と自ら宣言しておられるお方は、私たちの考えによって存在をたしかめ、証明すべきものではなく、むしろ私たちが信頼してゆくことを求めておられます。

私たちに関わりたもう神

私たちに自分を現わしてくださる聖書の神は、私たちが生活の片隅にいわば装飾品としてかざっておけばよいような仕方ではなく、人生全体、私たちの生き方そのものに関わるような関係を求めておられます。たとえ私たちが気づかず、認めていなくても、私たちと関わっておられます。そしてそれを私たちが心から認め、信頼してゆくことを待っておられます。「さわらぬ神にたたりなし」とばかり、敬遠しておけばよいわけではありません。神は「わたしは主、あなたの神」(出エジプト20・2)と宣言し「恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ」(イザヤ43・1)と呼びかけてくださいます。自分で生きようとしているのに迷惑だとか、束縛されるのはいやだとか、私たちは考えたがります。しかし、この神との関係は私たちの人生の根本にあります。そしてこの関係の中でこそ、ほんとうに人間らしく生きることができるのです。

イエス・キリストの中に示される神

マタイ 18・14 参照

多くの人々の中にまぎれていても、しょせんは孤独なひとりである私に、その心の深みをも見通して、神は父として呼びかけてくださいます。小さい者のひとりが滅びることも、父なる神のみこころではありません。神はそのことを、救い主であるイエスによって示してくださ

いました。イエスは「わたしを見た者は、父を見たのだ」(ヨハネ14・9)とさえ言われます。もちろん神の全体像が見え、その知恵のすべてが分かるわけではありません。しかし私たちに関わる神のみこころは、イエスによって示され、私も神のだいじな愛の対象として、語りかけられていることが示されます。私にとっての神の問題は、実は私自身が何者であり、どう生きることかという私自身の、問題でもあります。そしてこのイエスを、聖書は神のみ子とし、神と同じように「主」と呼ぶのです。

イエスを道として

どのように関係するかを別にして、客観的に神の存在を考えることはできません。正しい神関係の中であってこそ、神について語ることができます。したがって、いろいろな登り道はあっても同じ高嶺の月を見るというような言い方は、適切ではありません。イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことはできない」(ヨハネ14・6)と言われます。救いを目指す神関係は、主イエスによって定められています。その道を通して神に近づかなくてはなりません。

しかもこのような神関係は、私たちの頭の中だけのこと、たかぶる感情の中だけのことではありません。私たちの存在全体に関わっています。神のみ旨を聞きながら歩み始め、生き始めなければなりません。聖書は「神に近づきなさい。そうすれば神は近づいて」くださる(ヤコブ4・8)と言っているのです。

※私たちはふつう神さまをどういふものと考えているのでしょうか。そしてそれは、聖書が示している神さまと、どのように相違するのでしょうか。

(2) 宇宙の中の私の人生

初めに、神は天地を創造された。 (創世記1:1)

地とそこに満ちるもの 世界とそこに住むものは、主のもの。

(詩編24:1)

私は、神が私をすべての物とともにつくられたことを信じます。神が私に、からだとたましい、目と耳と両手両足、理性とすべての感覚を与えられたこと、今もなお保たれることを信じます。

(ルター・小教理問答書)

広大な宇宙の中の生

私たちは広大な宇宙のただ中に生きています。何億光年という彼方まで宇宙が広がっていることを科学者は教えてくれます。地球ができてから、生物が発生してから、人間の歴史が始まってから、長い長い年月がたっています。現在の地球の上にも58億という多くの人が生きています。気の遠くなるほど広大で長い歴史をもつ世界の中で、私たちはまことに取るに足りない、ちっぽけな存在であり、その生命もつかの間のものであります。けれども、私たちはひとりひとりかけがえのない存在として生きています。自分のように感じたり、考えたりする者はほかにいませんし、私たちはそれぞれ自分自身の人生を歩みます。愛してくれる者にとって、だれも代わることのできないひとりでもあります。

被造物としての私

どのようにしてこの世に生まれたかについて、私たちはある程度の説明をすることができますが、このかけがえのない人生の主人公としての私の始まりと基礎を十分に捉えることはできません。しかし聖書は、この世界と私とが、創造主である神によってできたのだと告げま

ローマ5:6-8, 1 コ
リント6:19-20 参照

す。小さくはかない存在であっても、神の被造物として、神の愛の対象であるのです。神の子イエスが私のために与えられたのは、神にとって私の価値がどんなものであるかを示しているということができます。

神の創造の働き

ヨブ記38章以下、詩編
19, 139編など、ヨハネ
1:1-3, コロサイ1:
15-20 など参照

聖書が示しているこの世の創造は、今日の科学的知識と同じ意味で世界の初めについて教えようとしているではありません。広大な宇宙がそのように生じたかよりも、私とこの世界が何を基とし、どんな意義をもっているかを明らかにしてくれます。天地の創造については、創世記ばかりでなく、ヨブ記や詩編、新約聖書のヨハネ福音書やコロサイの信徒への手紙の初めなどにも記されています。創世記自体でも1章と2章では造られた順序も少し違うように見えます。しかし、聖書自体がそのようなことを気にしないで、いろいろな言い方で示そうとしていることこそを、私たちが学びとってゆかなくてはなりません。

創造神信仰の意味

神が創造主であられるということが私たちに示している大切な点は、次のように言えるでしょう。

第一に、この世はただ自然の成り行きまかせにするとか、定まった運命のもとで機械的に動いているというのでもありません。すべてのものには、神が造られた目的があります。神は、愛をもって、愛する対象として、この世界と人とを造られました。私たちの存在は、無意味な、どうでもよいものではないのです。

第二に、神が創造主であられるということ

は、造られた自然界の法則や歴史の流れの中に神の意思の反映を見ることができても、そういう法則や原理を神と同一視できないことを示します。作者は作品とは別の存在です。どんなに不思議なものでも、被造物を神にまつり上げることはできません。

創世記1：28参照

第三に、神は人間をも造ってくださいました。人間は神の創造の頂点と言われます。そして、地を従わせ、すべての生き物を治める力と責任が人に与えられました。理性や感覚も神によって与えられています。人間の技術の進歩やこの世の発展は、たしかに多くの問題を起こしていますが、進歩に抗して原始的な生活をしたり、知恵を働かせないことが、よりよい、本来の姿であるというわけではありません。むしろ正しく理性を働かせて、神のみこころを実現してゆくように努める必要があります。

ヨハネ5：17参照

第四に、世界や人類が造られただけではなく、私の人生も神によって造られたものです。ずっと昔、神は天地万物を造り、以後は歯車の動きにまかせられたというわけではありません。今に至るまで、創造主は働いておられ、私の存在もそのみ手によるものにほかなりません。

創造からの逸脱

神によって造られたものとしての立場と責任の中に安住しようとしなくて、人間は自分の与えられた力を誤って用いたり、自分自身を神にしようとしたり、あるいは自分が左右できるものを神に仕立てたりします。こうして、本来のあり方を逸脱してしまいます。それが聖書のいう罪にほかなりません。創世記は、天地創造に続いて、人間の罪に陥ったことを語っていま

す。罪に陥った人間の現状は理想とはかけ離れたものですし、それに対して神がなさることは、その本来の働きではありません。人生の中に、様々な矛盾や悲しみ、不幸が起こるのは、このためです。もちろん出来事のひとつひとつの原因を自分で決めてしまうことはできません。ただ神が私たちの創造主であるから、万事が私にとってうまくゆき、すべてが私の目で見えて調和している、というわけにはゆかないのです。私たちは罪の中にありますし、創造主は私ではなくて神さまだからです。

人は科学の力を借りて、自分で生命までも造れるかのように考えます。しかし、考えの主体である自分の生の意味を、それによってないがしろにしようとさえするのです。有限な、死に向かっての存在でしかない、しかも考え悩む人間である自分を自覚するとき、ぞっとするような限界を感じないではいられません。

新しい創造へ

聖書は、そういう私たちが本来「み子によって」「み子のために」造られている(コロサイ1:16)ことを示します。このキリストに関わる存在として造られていることを認め、神に向かって心を開いてゆくとき、ひとりひとりに愛の語りかけをしてくださる神に出会うことができます。宇宙の中でひとりぼっちであるように感じられた私も、安心と希望をもって生きることができるようにされます。そして、「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」(2コリント5:17)と宣言されることができ、そのような新しい創造が、信仰によって私たちの中に始まり、新しい天地の創造(黙示録21:1)によって完成されるのです。

※聖書の創造に関する記事を読み比べてその意味を考えてみましょう。
※神が創造主であるということは自分にとってどういうことなのでしょうか。

(3) 問題としての私たちの現実

「神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拜んでこれに仕えたのです。」「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。」
(ローマ1:25, 5:12)

アダムの墮罪以後、自然の理によって生まれるすべての人間は罪をもって生まれてくる。すなわち、神を畏れず、神に信頼せず、肉の欲をもっている。
(アウグスブルク信仰告白第2条)

この世の問題の ルーツ

神さまによって造られ、愛されているはずの人間の現実には、その本来の姿にはなく、かえって問題のただ中にあります。世界には不調和が満ち、欲と疑いが争いあい、一寸先も見通すことができません。ひとりひとりの人間は、自分のいのちもいつまで確かなものか分からず、やがて死んでゆく人生を、ただ一日一日あくせくと過ごしています。お互いの間には気持ちが通じ合わず、孤独な思いにさいなまれることが多くあります。若さと美しさ、豊かさの幻影を追い求めながら、いつの間にか自分の限界を思い知らされるはめに陥ります。こうしたちぐはぐな状態のある部分は、社会的に改善することにより、多少はよくなるでしょうが、根本的な解決には至りません。むしろ私たちの問題は、神を神とせず、自分ですべてを考えてゆこうとすることにあります。それが聖書がいう罪にある状態なのです。

罪の現実とその 意識

罪という言葉は、法を犯し、良心に逆らい、犯罪的な行為をすることを連想させがちです。私たちはめったに警察のご厄介になるような犯

ローマ7章など参照

罪は犯さないかもしれませんが。しかし、それでも自分の良心に照らしてみると、すべきでないことをし、すべきだと思うことをせず、いつも自分の行動を後悔しないではられません。聖書はそのことを深く問題とします。たとえ個人的にはあまり悪いことはしていないようでも、社会のいろいろな悪から自分だけ手を洗って超然としているわけにもゆきません。逆に私たちの良心が鈍くなっている時もありますし、ある程度良心の咎めを誤魔化することもできないわけではありません。ほかの人に責任を転嫁したり、時代の流れだとあきらめていることもあるでしょう。

聖書でいう罪

けれども、私たちが心に感じている、いないということを超えて、私たちは罪の中にいます。しかもそれは、個人的にも社会的にも、悪いことをしたというだけではありません。私たちが自分の人生に不安であったり、孤独さを嘆いたり、死の恐れに悩まされたりしているのは、まさしく私の罪の現実のしるしです。聖書的な意味での罪は、神さまとの関係が正しく保たれていないで、私たちが的是はずれな生き方をしているということです。この世の標準での「悪いこと」だけが問題なのではありません。どんなにりっぱな生き方をしているようでも、正しい神さまとの関係になれば、罪のうちになり、恐れや悩みの中にあることとなります。それは「悪いことをした」という意識を超えている現実です。

罪の責任

ですから、「罪人」だということは、私だけが特別悪い者だという意味ではありません。だか

らと言って安心するわけにもいきません。「みんなで渡れば怖くない」式に、多くの人が同じようにしているからとか、未熟でうまくできなかっただけだとか、知らなかっただけだとか、思っただけで実害はなかったのだから、などということで、神さまの前での罪を免じられるわけにはゆきません。私たちは罪の責任を問われます。判定するのは私ではなくて神ご自身です。自分の罪を弁護し、ほかのもののせいしようとする事自体、罪の現われにほかなりません。しかも、私たちが直接あやまちを犯した相手が人であっても、神のみ前での責任を問われます。ダビデが「わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。あなたに、あなたのみわたしは罪を犯し、御目に悪事と見られることをしました」(詩編51:5-6)と言っているとおりです。

罪のわざと罪人であること

私たちは一つのことを前にして、そんなことをすると罪になると思って悩んだりします。確かに神さまのみ旨に添わないことをしないように努めることはだいじなことです。しかし、特定のことをしようすまいと、私たちは罪人でしかないことも事実です。罪の問題は、あれこれのことをしたか、しなかったか、ではなくて、もっと根源的な神さまとの関係です。そして神さまはいっさいの罪を許容しないで罰されます。罪の量が問題なのではなくて、正しい神関係の中になく、すべて神の怒りのもとにあると言わなければなりません。

正しい人はいない

「正しい者はいない。一人もない」、だれも

かれも、ことごとく罪のもとにあると、パウロは宣告しています（ローマ3:10）。すべての人が死ぬように、すべての人が罪の中にあります。確かに表面的には、あるいは社会的な罪についてなら、罪の大小があり、より正しい人を指摘することができます。けれども、ファリサイ派の人が徴税人の罪をなじるようなことしか、私たちにはできません。みんなが五十歩百歩であって、より正しいと自認している人が、実は人を許そうとせず、より深い罪の中にあることが通例だと言ってもよいでしょう。

マルコ2:18参照

ゆるされた罪人

しかし神さまは、罪人に対する救いの道を開いてくださいました。孤独で不安で、神のみ前に正しくない自分だという認識は、暗い絶望的な状態に私たちを追い込むだけではありません。私たちが自分の実態を認めて、神さまの前に助けを求めるように押しやります。そして神さまは、罪のうちにいるからと言って、人を見過ごしにしたりはなさいません。罪の宣告と共に救いの約束も用意しておられます。殺人者カインのいのちをも、神は保護してくださいました。そして私たちが保護されている間に、主イエスの救いに与かるように待っておられます。

創世記4:15参照

「子よ、あなたの罪は赦される」（マルコ2:5）と言って、私たちの罪を赦す権威をもって、主イエスはおいでになりました。主の十字架は、私たちに対する神の審判を代わって負ってくださる罪に赦しの出来事です。罪のうちにある者を追い求め、呼び返してくださる愛のみわざです。この主を自分の救い主と告白するとき、自分では負いきれない罪の負い目を赦されます。

※私たちが普通に罪と
思っていることはどん
なことでしょうか。そ
れは聖書的な罪観念と
どのように違っている
のでしょうか。

しかし、私たちはこの世に生きる限り、罪を犯
さないようになることはできません。救いの完
成は終わりの時に待望されています。その時ま
で、私たちは日ごとに悔い改め、赦され、新し
くされ続けなくてはなりません。

(4) 信仰ということ

イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のない私をお助けください。」
(マルコ9・23～24)

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。
(ヘブライ11・1)

われわれは、何ものにもまして、神を畏れ、愛し、信頼すべきです。
(ルター・小教理問答書)

相手のある信仰

上に引いたヘブライ人への手紙の一節は、どうかすると私たちがひたすら信じこみ、確信を強めてゆくべきだと教えているようにも思えます。もしそうであれば、私たちが勝手な望みや幻を掲げて、一所懸命に確信し、念じてゆけば、いつかはきっとその通りになるということが信仰だということになりかねません。私たちが信念をもって事に当たることは必要です。けれども、どういうことであれ、私たちの思いこみが力となるというのであれば、俗に言う「いわしの頭も信心から」と同じことになります。けれども、ヘブライ書が述べているのは、神のお約束に対する確固とした信頼です。信仰には相手があります。聖書が示している生ける神への信頼が問題なのです。

もし信仰が私たちの信念の強さや確信の深さと同じように考えられるなら、どこまで満足してよいのか分からないまま、ひたすらに修練してゆかなくてはならないことになるでしょう。しかし、信じる相手が大きく、力あるお方であれば、私たちの信頼や念力、精神集中の度合いによるのではなく、相手であるお方自身が

神さま流にそのみ心にかなうわざをなし遂げてくださるでしょう。ですから、ルターは信仰について次のように述べています。

「信仰は、ある人々がこれが信仰だと考えているような、人間的な妄想や夢ではない。彼らは福音を聞くとき、うわすべりし、自分の力によって心の中にひとつの思想を造りだして『私は信じる』と言い、これこそ本当の信仰であると主張する。しかしそれは、心の深みには達することのない人間的な幻想であり観念であって、そこからは何も出てこないし、何の改善も生じてはこない。」

「しかしながら、信仰は私たちの中に働く神のわざである。それは私たちを変え、私たちを新たに神から生まれさせる。」

「信仰は、神の恵みに対する生きた、大胆な確信であって、人はそれに千度でも自分のいのちを賭けることをいとわないほど、確かな、確実なことである。」（ローマの信徒への手紙序言）

ルターは聖書の各書に解説の序文をつけました。これはその中の「ローマの信徒への手紙」の序文の一節です。

「信じます」と 「信仰のない私」

信仰が自分の考えでなくて、神さまへの人格的信頼であるなら、自分自身の中では疑いや迷いがある場合もあります。たしかに信仰が私の確信を引き出してくれますが、「信じます」という決心と「信仰のない私」という自己判定が両立している場合もあるのです。マルコ9章の病気の子どもをつれた父親の態度は、そのことをよく示しています。亀井勝一郎は、信仰の反対は疑いでなくて不信仰だといい、また遠藤周作は、信仰とは99パーセントの疑いと1パーセントの希望でしかないが、しかも自分が見守られ、受入れられているという実感だと、言って

います。心の内には多くの疑問や理解に余ることがあっても、神さまへの信頼が言い表されることが必要です。ちょうど、子どもが親をすっかり理解しているわけではないけれども、信頼しているようなものです。

主に会おう

ヨハネ 5 : 39

どうかすると、一定の信仰箇条を受け入れることが信仰であるように考えたり、また聖書の記述の表面的な意味を何から何まで信じなくてはならないもののように思われたりすることがあります。たしかに聖書は信仰の土台であり、基準です。しかし、イエスは聖書に永遠のいのちがあるのではなく、それはご自身を証するものだと言われました。主ご自身が信頼すべき相手なのですから、主に会おうことを目指してゆかなくてはなりません。信仰箇条は、たとえば使徒信条にしても、ニケヤ信条にしても、それぞれたいへん大切な信仰の証しです。けれども、それを丸のみに受け入れたということが信仰ではありません。それらのものは、生ける主を、信仰においてどうにかして言い表そうとしているものなのです。主イエスに出会おうということは、あるいは主をとおして神さまに出会おうということは、どういうことによつてできるのでしょうか。「恐れるな、わたしはあなたの名を呼ぶ」（イザヤ43:1）と言われる神に、私たちがみ名を呼び求めることです。知識として理解するだけでなく、信頼する相手として祈ることです。

恐れ、愛し信頼する

聖書は、神さまが私たちが愛してくださり、私たちのために、独り子イエスをさえ惜しまな

いで与えてくださったことを示しています。その神は、私たちがまた愛をもってそれに応じることを望んでおられます。しかし、神のなさることは私たちの理解を超えています。具体的な現れ方では、私たちの希望的観測に反したり、人の思いをさかなでするようなこともあるかもしれません。人は罪の中にあって、いつでも神のみ心に反する方向へ行こうとする傾向をもっていますから、神への信頼やそのみわざを受け入れることは、具体的には神へのおそれという形を取るかもしれません。何でも自分の思いの中で神さまを理解してしまうのでなくて、神さまを神さまとしてたてること、それが神を畏れることにほかなりません。

神の愛も、そのような神さまの愛です、それはいつでも聖なる愛であって、いっさいの罪を克服し、罰しないではおかない力でもあります。私たちの安易な愛を当てはめて考えることはできません。ですから、信仰を「神を畏れ、愛し、信頼する」ことと言い換えることもできます。単に自分の感じや、考えの深さ、また確信するに至った経過や体験が問題ではなくて、聖書に示された神さまとの生きた関係が信仰の場所です。そしてそれは、自分のひそかな考えの中でではなくて、信仰者の交わりの中で導かれ、保たれ、成長させられていきます。

※私たちの信仰はどういう態度のもので、信じる内容は何なのでしょう。

(5) 神のみわざと人間の働き

産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の
上を這う生き物をすべて支配せよ。(創世記1:28)

人間の心は自分の道を計画する。主が一步一步を備えてくださる。
(箴言16:9)

神が私に、からだどたましい、目と耳と両手両足、理性とすべての
感覚を与えられたこと、今もなお保たれることを信じます。…そして
これらすべては、全く、私の功績とか、値うちによるのではなく、純
粋に父としての、神の慈悲とあわれみによるのです。これらすべての
ことのゆえに、私は神に感謝し、神を讚美し、また奉仕し、服従する
のです。(ルター・小教理問答書)

創造主と被造物で ある私

神さまが世界の主であり、創造主であるなど
といわれると、私たちはまるで自分の自由と主
権を奪われるような気がします。結局のとこ
ろ、神さまが何でもよいように事を運んでい
て、私たちはそれにあやつられているに過ぎな
いのでしょうか。むしろ人間は、いろいろな面
で目ざましい発展を遂げ、宇宙にまで手を伸ば
すほどになっています。不可解なことは神さま
のせいにした古い時代は過ぎて、もう宗教もい
らないというほど進歩して来ているのではない
でしょうか。人間は自分の中に創造していく力
をもっています。今は分からない、今はできな
いことでも、やがては解明され、可能になって
ゆくでしょう。けれども、やがては分かったと
しても、私の生きている間には間に合わないか
もしれませんし、人間が自分でできると思っ
ていることがとんでもない結果を招くかもしれ
ません。一度限りの人生に、やり直しはできま
せんし、自分自身の人生の意味や目的について

は、科学的な研究で解明されるべきことは違う側面があります。むしろ理性や感覚を与えてくださった造り主との関係を正しく押さえていることによって、ほんとうに理性的な働きを展開させて行くことができるのです。

信仰は不自由なものか

信仰生活をするということは、どうかするとたいへん不自由で、人間としての活動を制限するようなものとして受け取られることがあります。しかし、自由とか、不自由とかいうことは、何を基準とするかによって、たいへん違ってきます。人間が勝手気儘なことをするのを自由と考えるなら、神を神として認めることは基本的な人間への挑戦といえます。けれども「自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださった」（ガラテヤ5:1）とパウロは述べています。私たちがどういう状態を基準にとり、どういうことを求めていると考えるかによって、たいへん違った印象が出てきます。聖書が私たちに約束する自由は、人がしばしば見逃している、しかし一番基本的な問題です。ユダヤ人と主イエスの問答の中にも、そのことが明らかにされています。

ヨハネ8:31-36参照

神の恵みと人の責任

神さまが造り主であるということは、神さまがすべての出来事をあやつっているということではありません。人間は理性や感覚を与えられて、自分の力で治めていかななくてはならない分野があります。しかし、そこでも神さまの意図が現れるように、努めていかななくてはなりません。人がほしいままに振る舞ってもよいというわけではないのです。しかも神さまは人間を一

個の人格として造られました。自分で感じ、考え、決めることのできる主体です。そこで人の考えをただ強制的に導くことはできません。それだけに、私たちは神さまに正しく応答してゆくことが求められているのです。

ところが信仰の問題になると、ことは少しややこしくなります。自分が決心して、ほかならぬ自分が信じて、その信仰を言い表すことが求められます。しかも信仰を告白する人自身は、自分の力によるのではなく、神ご自身の導きによって信仰するようになったと言うでしょう。

平面的に見ると、たいへん矛盾しているように思えます。しかしそれは、事の経過の中で、どういう立場から考えられ、言われているかを注意して見分ける必要があります。結局神さまがすべてを導いているのだからといって、あらゆる出来事をみな神さまのせいにすることはできません。自分が信じる決断をしたのだからといって、なんでも人間の意のままに選択するのだと言うこともできません。

同じように、信仰などということは、弱い人にだけ必要なことだなどとも言えません。確かに信仰者は、自分の弱さを知っています。けれども、それは客観的に弱い人のグループに入れてよい人であるとは限りません。パウロが「力は弱さの中でこそ十分に発揮される」(2コリント12:10)と言っている通りです。息子の病気をいやして頂くように主イエスに願って、「信じます。信仰のないわたしをお助けください」(マルコ9:24)と言った父親の態度は、自分の弱さを知りながら、神に関わり、信じていくすべての信仰者に共通するものです。

※信仰によって束縛されるという印象はどういうことに由来しているのでしょうか。

(6) 神の語りかけとしての聖書

あなたは、自分が学んで確信したことから離れてはなりません。あなたは、それをだれから学んだかを知っており、また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。 (2テモテ3:14-15)

神はみことばによる以外には把握しえない。したがって、義認はみことばによって起こるのである。 (アウグスブルク信仰告白弁証)

語りかけとしての 聖書

聖書はキリスト者の信仰と生活の基準であり、神のみことばです。しかし、たとえば呪文のように、何が何だか分からなくても効力をもっているというわけではありません。また書いてあることがその通り事実だというだけでもありません。私たちがそれを読んで分かり、それに答えてゆくことができるように、私たちに語りかけるみことばです。しかも神さまは、そのみことばを書物にして天から下されたわけではありません。むしろ歴史の中の出来事をとおして語られました。ですから、その時代的な背景や表現も正しく見分けてゆかなくてはなりません。そしてその中心は主イエスの出来事です。神さまはいろいろな方法で、それぞれの時代に語られましたが「この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られ」(ヘブライ1:2)しました。「語りかけ」であり、メッセージであるということは、一般的な真理を述べているというのではなくて、それによって私たちがたいせつな用事にかりたてられるような、伝言であり、告知であるということです。

聖書の読み方

現在ではだれでも書物としての聖書を手に入れ、日本語で読むことができます。文学としても、歴史的な文書としても、聖書は重要な意味をもってきています。しかし、長い歴史を通して、たくさんの信仰者を導き、それに影響を与えた書物としてこそ、たいせつです。それは、もともとキリスト教会の中で書かれ、保たれ、読まれてきた経典です。教会の交わりで、礼拝や聖書研究の中で読まれ、聞かれることが大事です。そこでは、たんに聖書の表面的な意味の解明だけではなく、本来の意図に添って受け取られ、それを受け入れる人々の喜びや感謝、願いや疑問、迷いなど、具体的な反応が生じてきているからです。自分の気にいった部分だけを、格言のように聞き出すだけでは足りません。分からないことがあっても、いつも全体を貫く中心となるメッセージを軸にして読んでゆくことが必要です。改革者ルターは、聖書を幼子イエス・キリストを包む産着、それを横たえた飼い葉桶になぞらえました。そのイエスを救い主として告白する教会の信仰告白は、聖書の信仰に基づいていますが、逆にまた私たちが聖書を読み解く手引きでもあります。

取って読めよ

アウグスティヌス(354 - 430) 西方最大の教父。「告白」を初め幾つかの書が訳されている。

むかしアウグスティヌスは、悩みの最中に、子どもたちが「取って読めよ」と歌う言葉を聞いて聖書を開き、ローマの信徒への手紙13章の終わりの部分を読んで、それが回心の契機になったということです。たしかに、神さまは不思議に聖書をとおして私たちにそのみ旨を示してください。けれども、聖書のことばをこまぎれにして、つまみ食いしたり、たんに人生の

キェルケゴール（1813-55）デンマークの思想家。「死に至る病」など多くの書が訳されている。

教訓集のようにだけ扱ってはなりません。キェルケゴールは、聖書を読むことを、外国語で書かれた愛する者からの手紙にたとえました。そこには、愛の言葉ばかりでなく、頼みごとも記されています。読み解くための努力と、自分に宛てられた愛の言葉を聞こうとする心が必要です。全部を翻訳し終えなくても、また全部を訳してみたなら間違えていたことが分かったというようなことがあっても、分かっただけの依頼を果たそうと走り回るような思いが、聖書を読む時に必要だということです。

聖書の成り立ち

聖書は旧新約全体にわたると、1000年以上の年月をかけて、多くの人々によって書かれたものがまとめられ、信仰を正しく伝えるものとして、教会の正典とされました。救い主のお出でになるのを待ち望んでいる旧約（古い契約）の部分と、救い主イエス・キリストを証しする新約（新しい契約）の部分に分かれます。旧約聖書だけですと、ユダヤ教の正典でもあり、イスラム教でも用いられますが、キリスト教会は新旧約聖書を一貫したものとして受け取っています。旧約に属する時代にも、また新約聖書が書かれたころにも、聖書に入っていない多くの信仰的な書物がありました。その中にはいろいろな意味で参考になるものもありますが、教会はその信仰に照らして、公の正典の中に入れるべきものと、そうでないものを区別したことは注意すべきことです。神のみわざをできるだけ正確に、またその本来の意味を伝えるものとして、聖書はキリスト教会の基礎なのです。

聖書の意図に添って

旧約聖書はもともとヘブライ語で、新約聖書はギリシャ語で書かれています。そのようにまとめられる以前の用語の問題もありますし、何分古い時代の文書ですから、絶えずその内容を正しく受け止めようとする努力がなされています。

しかし、いつでも聖書本来の意図に照らして読み解かれてゆくことが必要です。歴史的な叙述の部分も、決して今日の意味での歴史的記録ではありませんから、その時代の人々の理解の仕方、ことに信仰の態度を基にして考えなくてはなりません。現代人の目からすれば不正確であったり、神話的であったりする面もないわけではありません。しかし、たんなる作り話ではなく、たしかな視点をもって書かれています。それは、歴史の中に働く神さまのみわざと、冷静な信仰の目による人間の現実を描いています。例えば旧約時代の王たちの記述にしても、決して単純な政治史としてではなくて、信仰の目によって、彼らの罪も明らかにしています。聖書の記者たち自身は、自分が聖書の一部分を書こうなどとは考えもせず、それぞれに使命や必要を感じて書いたのでしょう。そして当然それぞれの時代の制約を負う様式で書いています。しかし、それを通して、神さまはそのみ心を現わし、また信仰者の交わりの中で聖書として読み継がれて来たのです。

聖書の諸書

旧約聖書には、モーセ五書あるいは律法と呼ばれている部分、歴史書、詩と知恵文学、預言書が含まれています。新約聖書には、直接イエス・キリストの生涯とその働きをしるした福音書、初代教会の成立の記録である使徒言行録、

パウロやペトロなど初代教会の指導者たちが特定の教会や個人に宛てて書いた手紙、世の終わりと新天新地出現の望みを描いている黙示録が含まれます。旧約聖書は39、新約聖書は27、合計66の文書が聖書を構成しています。天地の創造から世の終わりまでを述べているこれらの文書は、一致してイエス・キリストにおける神の救いのわざを証しています。福音書記者ヨハネは、「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、そう信じてイエスの名により命を受けるためである」（ヨハネ20:31）と書いています。それは全聖書の意図することでもあります。

旧約聖書続編

現在手にいれることのできる聖書の中には、旧約聖書、新約聖書のほかに、「旧約聖書続編」と呼ばれている文書が入っているものがあります。「旧約聖書続編」という呼び方は、必ずしも適切ではありませんが、初代のキリスト者たちも用いていたギリシャ語の旧約聖書に入っていた文書です。ユダヤ教の正典の中には入れられず、キリスト教会でもこれを正典に数えません。しかし、旧約と同じような価値を認めた教会もあります。宗教改革の時にルターは、旧新約聖書全巻の翻訳に「続編」の大部分を加え、「これらは、聖書と同様に考えられる書ではないが、読んで有益で、よい書物である」と述べています。さらに、それぞれに序文を添えて、神の救いの歴史や信仰との関わりを述べています。ただし、ルーテル教会ではこれを正典としないので、礼拝の公の朗読などには用いられません。

聖書の正典は、教会で教えと信仰生活の基準として受け入れられたもの。

※私たちが聖書を信じるというとき、それは具体的にどういうことを意味するのでしょうか。

(7) イエス・キリストの出来事①

シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。
(マタイ16:16)

主は聖霊によってやどり、おとめマリアから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ陰府にくんだり、三日目に死人のうちから復活し、天に上られました。
(使徒信条)

イエスの生涯の おとずれ

イエスは紀元前4年ごろユダヤのベツレヘムに生まれ、紀元30年ごろエルサレムの郊外で十字架の上で亡くなりました。西暦はA. D. (アノ・ドミニ、主の紀元)ですから、イエスの誕生をもって始まるはずですが、今のように年代が定まったのは紀元6世紀ごろで、その後の研究では4年から7年くらいの相違があると考えられています。実際イエスの出来事について最初に人々が注目したのは、その説教と愛のわざでしたし、のちにまでも伝えられなくてはならない一番重要なこととして人々が印象づけられたのは、その十字架の死と復活でした。その誕生や少年時代、また最後の2-3年の伝道の生涯についてさえも、私たちに伝えられているのは、主の死と復活によって信仰に目覚めた人々の証言によっているのであり、客観的記述というよりはむしろイエス・キリストが私たちの救い主であることを証しているのです。

その誕生と生涯

クリスマスはイエスの誕生を祝う時です。しかしその実際の誕生日は知られていません。最初のキリスト者たちの関心は、むしろ復活の日にありました。しかしイエスが確かにこの世に

おいでになったことの意義を考え、祝うために、3世紀ごろから冬の日が長くなりはじめる境の冬至のころを選んで、祝いの日にしました。

イエスはこの世において、人々の中で生活されたのですが、しかし神から遣わされたみ子であり、救い主です。おとめマリアからの誕生も、そのことを示しています。

サムエル記上 16章参照
マタイ 1 : 21 参照

かってダビデが少年のころ、預言者サムエルによって次代の王として見いだされたのと同じ、ベツレヘムの町で誕生されたイエスは、ユダヤ人の習慣にしたがって、生後八日目に、あらかじめ使いが告げていた「イエス」の名を付けられました。それは「主はわが救い」を意味する「ヨシュア」という名のギリシャ音訳です。

マタイは、幼子イエスがヨセフとマリアに守られて、生後間もなくエジプトに行かれたことをしるしています(マタイ2:13以下)。その後ガリラヤのナザレという町で育たれました。ルカはその少年時代の興味深い挿話を伝えています(ルカ2:41以下)。

およそ30歳になられたころ、ヨルダン川で悔い改めを説いていたヨハネのもとで洗礼を受け、荒れ野の生活を体験された後、イエスご自身神の国の福音(喜ばしいおとずれ)を宣べ伝えて、いわゆる公生涯に入られました。町々をめぐり、会堂で教え、福音を宣べ、人々のあらゆる病気をいやしてくださいました。そのみことばや力あるわざを、福音書は記しています。マタイ5-7章のいわゆる山上の説教は、その教えをまとまった形で示していますし、また多くの神の国についての譬えが伝えられています。

マタイ 16 : 16以下参照

弟子たちは、このお方こそ「生ける神の子、メシア」と告白しましたが、イエスご自身人々の期待する政治的なメシア（油注がれた者＝キリスト、神によって人々を救う役に任じられた者すなわち救い主の意）の姿に反して、「多くの苦しみを受けて、殺される」ことをお示しになりました。イエスが目指しておられたのは、政治的、地上的なイスラエルの解放ではなくて、全人類に及ぶ、もっと根本的な、神の前での罪の問題の解決でした。しかし、反対者たちは従来の考え方に照らして、イエスの権威を認めることができず、かえって神を冒瀆する者とし、言いがかりをつけてこれを裁判にかけ、十字架につけるようにしてしまいました。そしてイエスは、三十余年で短い地上の生涯を終えられました。

復活と教会の誕生

使徒言行録 1 : 1 - 12

十字架につけられ、死んで葬られたのち、イエスは三日目に復活されました。復活された主は、敵対者に対する報復のためではなくて、気落ちしていた弟子たちを信仰に立たせるために現われ、神の国について話されました。そして父なる神の約束にしたがって、聖霊のくだるのを待つように命じ、復活後40日で天に上げられました。

マタイ 28 : 18 - 20

それによって、弟子たちは地上の姿でのイエスにお目にかかることはできなくなりましたが、イエスは世の終わりまで、いつも共にいることを約束されました。弟子たちは、約束の聖霊を受けて、キリストの福音を地のはてにまで伝えてゆく力を与えられました。この福音を信じて、イエス・キリストに信仰によって結びつけられた人々が教会を形成しました。それは、キリストをかしらとするからだとよばれ、主イ

エスのみわざを継続するために仕えます。

イエスの現在と将来

イエスの地上の生涯が弟子たちに大きな印象を与えたことはもちろんですが、その死と復活に直面したことが、彼らに新しい、より深いキリスト理解を与えました。ですから、弟子たちにとって、イエスは過ぎ去った時の思い出の中の存在ではなく、彼らは復活して生きておいでになるイエスをいつも目前に見ていたのです。直接の弟子たちだけのことではありません。今日の私たちも、聖書のことばや礼拝、祈りなどをとおして、現在も生きて働いておられる主を、繰り返し心に受け、その働きに合わせられてゆかなくてはなりません。

そのような現在のあり方にとどまらず、イエスご自身世の終わりに再びやって来ると言われ(マタイ24章)、信仰者たちはその主の来臨を待ち望んでいます。それはたんに世の終わる破滅の時というのでなくて、イエス・キリストによってもたらされた私たちの救いが完成する時でもあります。

1コリント1:7, 16:22, 黙示録22:12 以下など参照

福音としての イエスの出来事

地上におけるイエスの生涯から、聖書の記者たちは世の初めにさかのぼり(ヨハネ1:1以下、コロサイ1:13以下、ヨハネ8:58)、そして世の終わりまで見通しています(黙示録21、22章)。そしてイエスの出来事全体が私たちに対する「福音」として伝えられます。主の生涯は偉大な過去の、遠い国の人物の物語ではありません。今の、私に関わること、私の人生に救いをもたらす出来事として語られます。私たちの救い主の出来事です。

※イエスの生涯のあらまははどのようなものだったでしょう。
※それは私たちにどんな意味があるのでしょ
うか

(8) イエス・キリストの出来事②

この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方がわたしたちの主イエス・キリストです。

(ローマ1:2-4)

父から永遠の中に生まれたまことの神であって、おとめマリアから生まれたまことの人イエス・キリストが、私の主であると、私は信じます。

(ルター・小教理問答書)

神の独り子

イエスが洗礼をお受けになったとき、「これはわたしの愛する子」という声が、天から聞こえました(マタイ3:17)。山上でイエスのみ姿が変わったときもそうでした(マタイ17:5)。イエスは父なる神の独り子ひとり(ヨハネ1:14)であり、「わたしを見た者は、父を見た」(ヨハネ14:9)とさえ言われるお方です。

私たちが神の子であり、神さまを天にいます「われらの父」と呼びます。しかし、私たちが神の子であるということと、イエスが神のみ子であるということは、意味が違います。イエスは神の独り子として、神から生まれた方です。私たちがもともと神に造られましたが、罪のために神の怒りを受けるべき者でしかありません。しかし、私たちが、独り子であるイエスを信じるとき、神の子とする霊を受け、神を「アッパ、父よ」と呼ぶことが許されます(ローマ8:15)。イエスをご自身が神との親しい交わりの中にあっただけでなく、神が人々の悔い改めを待ち、ゆるし、受け入れ、導いてくださることを教えられました。そしてイエスの名を信じる人々に

「アッパ」は父に対する親しい呼びかけ。
放蕩息子の譬えはルカ15:11以下参照

は、神の子となる資格を与えてくださいます
(ヨハネ1:12)。

イエスは主

「イエスは主である」(1コリント12:3)というのは、最も古い信仰告白のひとつです。「主」というのは、私たちの主人であり、支配したもうお方だということです。イスラエルの人々は、ことにこの言葉を神にあてて用いましたが、当時の世界ではローマ帝国の皇帝をはじめ多くの「主」と呼ばれた人たちがいました。その中でイエス・キリストを主と呼ぶことは、政治的に身の危険を招く場合もありました。イスラエルの人々は厳格な唯一神ひいっしんを信じていましたから、神にのみあてて用いられた「主」という呼び名をイエスに対して用いるのは、宗教的に非難される恐れもありました。しかし、十二弟子のひとりトマスは、復活の主に出会ったとき、「わたしの主、わたしの神よ」と呼びました(ヨハネ20:28)。信じる人たちは、イエスを神の独り子と認めたばかりでなく、神ご自身の神性をその中に見ました。そして聖霊の助けによって「イエスは主」と告白したのです。

神のキリスト

「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」という主イエスの問いに、ペトロは「神からのメシア」と答えました(ルカ9:20)。メシアはもともと「油注がれた者」の意味で、キリストはそのギリシャ語訳です。旧約時代において、職につくとき、香油を注いで、神がそれに任じたもうしるしとされたものに、王と祭司と預言者がありました。イエスは神によって救い主として遣わされた「油注がれた者」でしたが、独特

の意味でこれらの職務をご自分のものとなさいました。

すなわち、イエスはこの世のものでない神の国をもたらしてくださった王でした。人々が地上の王に祭り上げようとする、それを避けられました、十字架の上の罪状書きは「王」と主張したということでした。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」とだけ書いてあって、十字架の上では公に王と認められたとも言えます（ヨハネ19:19）。権力によって支配し、仕えられるお方ではなくて、愛によって仕え、人々の心を支配せずにおかない王でした。

エルサレムの神殿では、人々の罪の赦しを願って祭司が繰り返し犠牲を献げました。イエスは繰り返す必要のない完全な献げ物として、ご自分を神に献げられた「恵みの大祭司」でした（ヘブライ9章）。それによって、すべての人の罪をあがない、神と人の間の仲介となりてくださいました。

預言者たちは、神のみことばを取りついで、「主はこう言われる」と前置きして語りました。イエスは自分が語っているのは、「自分から話しているのではない。わたしの内におられる父」のわざ（ヨハネ14:10）であると言い、預言者とは対照的に「わたしは言う」（マタイ5:22他）と権威をもって宣言されました。

弟子たちが心に描いたキリスト像とも違って、主イエスは独特な仕方でキリスト、救い主でありました。人々の期待を越えてイエスが救い主であり、キリストであられたことを、聖書の示すところに従って見てゆかなくてはなりません。

神の国の福音

主イエスの宣教の初めの言葉は、「悔い改めよ。天の国は近づいた」(マタイ4:17)でした。天の国あるいは神の国は、人間が死んだのちにゆく世界ということではありません。たしかに、救いに与かる人々は、死んでも天国へ行きます。しかし、それは今も、すでにやって来ている神の支配を意味しています。神のみ旨が支配しているなら、そこにはもうみ国が来ています。人間の生死という状態の変化によって、天国に入ることができるのではなくて、主イエスがみ国をもたらしてくださったのです。イエス・キリストを信じるといえるのは、この主によってやって来た神のみ国、支配を、私たちの中に受け取るということにほかなりません。

しるしとしての 力あるわざ

主イエスによる救いは、ただ主の説教の中に、私たちの生活にもあてはめられる真理を見るというのではなくて、その全部のみわざを通して与えられる罪のゆるしの福音を受け取ることによって、私たちのものとなります。イエスはみことばを伝え、また多くのいやしや奇跡をなさいました。それは人々を驚かしたり、自分の力を誇示するためのわざではなく、愛のみわざでした。しかもそれによって人々が神の働きを知るためです。ですから、利己的な動機のものや、人を罰するような奇跡はありません。特別な道具も手続きもなしに、主は権威をもって行なわれました。奇跡そのものの不思議に目を奪われないで、それが何を語っているかを考えてゆかなければなりません。その奇跡のみわざによっても、主は神の恵みを語ってくださるのです。

※主イエスが神のみ子であることと私たちも神の子と呼ばれることは、どういう関係にあるのでしょうか。
※主・イエス・キリストという呼び名のそれぞれの意味を考えましょう。

(9) 十字架と復活の主

へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。(フィリピ2:8-9)

主が金や銀をもってではなく、ご自身のきよい、尊い血、罪なくして受けた苦しみと死とをもって、失われ、罪に定められた人間である私を、すべての罪と、死と、悪魔の力とから救い出し、あがないだし、かちとってくださったことを私は信じます。(ルター・小教理問答書)

信仰のしるしとしての十字架

イエスのみことばも、力あるわざも、神の国がイエス・キリストによって来たということを示しています。その神のみわざの頂点が、主イエスの十字架の死と復活です。福音書は、そのほぼ三分の一を、主の受難の一週間についてついでにしています。使徒信条は、イエスの誕生から直ちに受難と十字架を告げています。主がもたらしてくださった国はこの世のものではありませんでしたが、人々は主イエスを政治犯のように取り扱い、十字架による死刑にしてみました。しかし、それは主イエスの伝道の悲劇的失敗というわけではなくて、むしろ救いのみわざの中心でありました。ひとりの宗教的指導者の悲しい最期というのではなく、私たちにまで及ぶ神のみわざの証しです。それだからこそ、クリスチャンは本来死刑執行の道具である十字架を、自分たちの信仰の旗印としたのです。

十字架による赦し

人間は、自分たちの中に神が介入して来られるのを、いつもきらいます。マタイ21章(33-42)に語られたぶどう園の農夫たちのように、

人は神の愛を示しておいでになったみ子イエスを受け入れるのも拒んで、これを抹殺しようとしてしました。しかし、神は家を建てる者たちに捨てられた石を、逆に彼らの仕事に最も重要な石としてくださいました。神に敵対しようとした人間の行為を逆手にとって、救^ひしの出来事にしてくださいます。そのような形で、主の十字架は神の愛のみ旨の実現でありました。主の十字架はまた、私たちの罪に対する神の怒りの判決を私たちに代わって引き受けてくださった姿でもあります。み子イエスの十字架は、ご自身に課せられた悲劇というよりも、私たちの悲劇的運命を、私たちに代わって負ってくださったのです。それによって、主は神の正しさ、聖さを示し、同時に私たちを神の怒りから解放してくださいました。こうして十字架は、神とすべてのものの和解のしるしとなり（ローマ5:10、エフェソ2:16）、私たちに對する比類のない神の愛の啓示となったのです。

すべての人の贖い

十字架は私たちの飾りではなく、私の身代金として主イエスのいのちが与えられたことを承認し、受け入れるしるしです。そのことは、いろいろな仕方で聖書に説きあかされています。すべての人の贖^{あがな}いとしてご自身を献げられた（1テモテ2:6）というのは、ご自分の命を私たちの身代金として支払い（マタイ20:28）、ご自分のものとして買い戻してくださったということの意味をしています。それはまた、私たち一人ひとりに途方もない値段がついたということでもあります（1コリント6:20, 7:23）。

聖所において祭司が民の罪の赦しのために献

げる犠牲に、主イエスがなぞらえられ（ヘブライ9:14）、またイエスは「世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ1:29）とも呼ばれました。小羊の血を家の入口に塗って、神のさばきの使いを過ぎ越させた、過ぎ越しの出来事（出エジプト12章）にならって、キリストの犠牲を「わたしたちの過ぎ越しの小羊」（1コリント5:7）といている場合もあります。契約のかためとして捧げられた犠牲の血に、十字架の血がたとえられてもいます（ヘブライ9:16以下）。主イエスがすべての人のために死なれたことにより、すべての人が罪に対して死んだのであり、罪と死の力が滅ぼされたという形で述べられてもいます（ローマ5-7章、1コリント5:14ほか）。十字架はいろいろな形で言い表される神の愛の勝利のしるしでした。

からの十字架

十字架で死なれた主イエスは、弟子たちによって十字架の上から取り下ろされ、墓に葬られました。しかし、神のみ子が死によって支配されてしまうはずはありません。三日目に、完全な死の中から復活して、天に上られました。しかしそれは、イエスがそのように力のあるお方であったというだけではありません。十字架がすべての人の罪の赦しのためであったように、主の復活はすべての死者の復活の初穂でした（1コリント15:20）。罪と死の力のもとにいた私たちも、信仰によってこの主とひとつになり、復活のいのちにつらなることができるようにされます。それはいつか死んだのちのことであるだけではありません。現在すでに、そのいのちにあずかって生きることができるのです（エフ

エソ2:6, 1ヨハネ3:14)。ふつう私たちが信仰のしるしとするキリスト像のついていない十字架は、イエス・キリストの十字架の死を私たちのための出来事として覚えさせるだけでなく、もうそこにおられない復活の主を考えさせる「からの十字架」です。その主が私に働きかけ、語りかけ、共にいてくださるのです。

主の十字架と自分の十字架

主イエスは、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(マタイ16:24)と言われました。それはただ自分に負わされた運命の重荷に耐えきなさいということではありません。

主が十字架の木を負ってゴルゴタへの道を歩まれたとき、たまたま通りかかったキレネ人シモンは、その木を主のために背負うことを余儀なくさせられました(マタイ27:32)。私たちは、私たちの罪の赦しのための主の十字架を信じて受け取ることがまず必要ですが、それだけでなく、主の愛を受けて、私たちがまた、ほかの人たちのために苦難を引き受けてゆくのです。そのためにはまず、自分中心の思いを十字架につけて滅ぼしてしまうことだと、パウロは言います(ガラテヤ5:24)。十字架のしるしは胸もとを飾るためというよりは、むしろ私たちが背負ってゆくべきものとして与えられているのです。

※十字架が、キリスト教や教会のしるしとなっているのはなぜでしょうか。

※聖書の示している救いの説明を、それぞれよく考えてみましょう。

(10) 救 い

わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。

(ローマ1:16)

わたしたちは、これほど大きな救いに対してむとんちゃくでいて、どうして罰を逃れることができますよう。(ヘブライ2:3)

救われるということは、周知のように、罪と死と悪魔の力から解放されて、キリストのみ国にはいり、キリストとともに永遠に生きるということにほかならない。(ルター・大教理問答書第四部)

求めている救い

私たちはだれでも救われることを願います。しかし、どういうことから救われることが課題なのでしょう。またどういう状態を救いの状態としているのでしょうか。たしかに病気や突発した困難な事態に際して、助けを呼び求め、なんとかそれを無事解決したとき、救われたと思います。そういう困難が生じたのは、何かの宗教的原因があったからだとか聞かされ、一定の仕方でその原因を取り除こうとつとめたり、自分の孤独な気持ちや死の恐れにおののいたりして、その解決を求めてゆこうとしていることもあります。人生には、いつでも何か救いを求めさせずにいない要素があります。生きていること自体の重荷と言えるかもしれません。私たちは何を求めているのでしょうか。そして逆に、聖書はどのような救いを与えようとしているのでしょうか。

全体としての人の問題

世の中には、自分の心構えを変えることで、事を見る目が改められるということがあります。一時的な病気などのように、いろいろな手

段をつくせばいやされることもあります。痛みは去っても不便が残り、何とかしてそれを補わなくてはならないという場合もあります。個人的な世話をすることで、ある程度解決できることもあります。しかもそういう助け合いの仕組みが、社会的に組織されてゆくことも求められます。経済的に豊かになり、技術が進歩してゆけば、次第に消えてゆく問題もあります。

しかし、このように私たちの考え方を変えたり、外面的な条件を改めたりするだけでは解決できないことがあります。人間関係の中での問題は、自分のことだけでなく相手のあることでもあります。自分の生死の問題、自分の罪責感、よいことをしようと思いつつも悪の力に押し流される心の問題などは、ただ外面的な条件を整えたり、気持ちを変えたりするだけで解決するわけではありません。

精神的にも物質的にも、個人的だけでなく社会的にも、それぞれ問題に応じた努力をしなければならぬのはもちろんですが、人の力ではどうすることもできない問題があります。第一、自分の中で解決に取り組む気力が失われていては、どうすることもできません。

私たちの問題の全体の姿を見ながら、そういう問題の中にある私たちと関わってくださる神さまとの関係を考える必要があります。神さまとの関係は、たんに精神的なことでも、個人的なことに限られるのでもありません。実はあらゆる問題の基礎にあることです。

罪と死と悪の力から

「わたしたちがすくわれるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないので

す」(使徒言行録4:12)とペトロは言いました。イエス・キリストによる救いは、私たちの罪をゆるし、神の子として新しいのちに生きることができるようになります。罪がゆるされるといふことは、神さまとの安全な交わりをもち、信頼してゆくことができるということです。それは私たちの人生が孤独な、頼り無いものではなく、大きな神の愛の対象としてあることを示します。私の人生が決して偶然の産物ではないし、意味のないものではないことを保証します。神の子とされて生きるとは、この世での生活の中で、神さまのみ心にかなうものになるように努力してゆくように、私たちを励まします。ほかの人たちもまた、神の創造による大切な存在であり、その愛の対象でもあるのですから、それぞれに尊重してゆかなくてはなりません。しかし、造られた本来の人間として生きるには、正しい神さまとの関係をもってゆくように勧めることが必要になります。

さまざまな社会的な悪の力を制御し、人がほんとうに人間らしく生きてゆけるようにと、私たちは望みます。それはたいへんな課題です。いつも新しくどういう方向に進んでいったらよいかを考えてゆかなくてはなりません。ルターは、信仰はよい行ないがなされなくてはならないかどうかなど聞く前に、すでに行ない、いつでも行ない続ける、生きた、勤勉で活動的なものであると言います。

しかし、どんなにりっぱな人でも、いつかは死んでいきます。死は私たちすべての者に、冷たく限界を定めます。しかし復活の主への信仰は、そのいのちに私たちもあずかることができ

るようにします。この世の生で終わりでない希望を与えます。ほかの人々の死も、神さまの愛のみ手のうちに委ねることができるのです。

キリストによる救い

救いは罪と死と悪の力から、キリストによって解放され、主のものとしてこの世においてもみ国においても、主に仕えるようになることです。それはただ霊的とも言える喜びや心が高められる体験によって、目に見える世界だけではない見通しを得られるというようなことだけではありません。ささやかでも欲張りさえしなければ、快適な、悩みのない状態をこの地上で送ることができるというようなことだけでもありません。

信仰において、主イエスによって罪をゆるされ、神との交わりをもち、永遠のいのちを保証され、復活の日を待ち望み、地上にあってもみ国にあっても主のものとして主に仕え、主と共に生きることがゆるされます。罪の中にある不完全なこの世では、その信仰によってかえって一時的な困難が生じることもあります。私たち自身がしっかりと主に信頼できず、目に見える苦難や快樂にまどわされることも起こるでしょう。しかし、主イエスには完全な救いがあります。それが完全に私たちのうちに実現するのは終わりの日ですが、すでに私たちの中にみわざを始めてくださった神に信頼して進みたいものです。

※「あなたは救われていますか」と問われたら、どう答えることができるでしょうか。

(1) 再び来たりたもう主

ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有り様で、またおいでになる。(使徒言行録1:11)

終わりの日に、私とすべての死者をよみがえらせ、私に、キリストを信じるすべての者とともに、永遠の生命を与えてくださいます。これは確かにまことです。(ルター・小教理問答書)

天に上げられた主

主イエスは復活ののち、天に上げられたと聖書はしるしています。天という言葉は、単純に大空と同一視することはできません。わが国のむかしからの言い方でも、天はしばしば人格的な、神とほぼ同じ意味で使われたりしています。聖書的な表現では、それは神がおられるところを指しています。そして神は私たちの考えを越えて、いつでも、どこでも私たちに近くお出でになります。すると、主イエスが天に上られたということは、神と共にいて、私たちに働きかけていてくださるということを示していると考えてよいでしょう。

神の右に座す

天に上られた主は、父なる神の右に座を占めておられると(マルコ16:19)、聖書は告げています。神の右においでになるというのは、最も高い權威の座であるということと共に、いわば神の右腕としてその働きをなされるということでもあります。また逆に、一番神さまに近いところで、私たちのため仲介となりてくださることを示しています(ローマ8:34)。

初めであり終わりで ある主

イエス・キリストは、30余年の間、地上で生活

されただけではありません。アブラハムの生まれる前から、天地創造の時から、働いておられます(ヨハネ1:1以下、8:58)。また世の終わりで、いつも信じる者と共にいることを約束なさいました(マタイ28:20)。さらに私たちのところに「戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える」(ヨハネ14:3)と言われます。世の終わりには、天の雲に乗ってやって来る(マタイ26:64)と宣言なさいました。私の将来も、この世の将来も、この主のみ手の中にあります。終わりの時は、私たちにとっては救いの完成がもたらされる希望の時であり、今の歩みにとっての慰めであり励ましでもあります。しかし、それがさばきの時となる場合もあるのです。

黙示録 22 : 13

創造の初めにも、世の終わりにも、主イエスが共にいてくださるということは、私たちの歴史が神の恵みのみ手に包まれていることを示しています。私の人生についても同じです。初めにも終わりにも、主がいてくださいます。

再び来られる主

主イエスの再臨がこの世の終わりをもたらします。科学者は人類の将来も、地球の未来も、いつかは終わりになることを告げます。しかし、自然の過程の果てに終局となるのではなく、神の側から終わりが告げられると、聖書は示しています。しかもその終わりは、破局としての終わりではありません。新しい天地創造の時です。終わりには、恵みの主が立っておられます。その主のみ手にすべての将来がゆだねられなくてはなりません。

終末のしるし

主の再臨にともない、戦争、地震、稲妻、雷、

黙示文学は、幻や異象
を見るという形で神の
み旨を示そうとする文
書。

天体のゆれ動きなどというような出来事があると聖書は語っています。しかし、それは本来私たちの体験の中では理解することのむずかしいことを、具体的なイメージを用いて示しているのです。黙示録の記述も、いわゆる黙示文学という手法によって述べているので、そのままを直ちに終末のスケジュールとして考えることはできません。しかし、たしかに、キリストの権威と支配が明らかになる、その時がやって来ます。いちじくの木が芽をふくと、夏が近いことが分かるように、終わりの時を唆するしるしは私たちの周囲にいくらかでも見いだせます。そしてその日、その時は、盗人のように、私たちが油断している時にくるかもしれません。だから、いつでも終わりに向かって備えていなくてはなりません。

私の終わりはこの 世の終わり

終わりの日についての警告は、私たち個人個人にとっては自分自身の終わりである死の時についての警告でもあります。不治の病いを宣告され、余命がいくらかもないなどと診断されるなら、私たちはあわて悲しんだり、絶望的になったりするかもしれません。しかし、もともと私たちの人生は、百年を越えることもなかなか難しいものです。必ず終わりが来ます。この世の終わりは、自分だけのことでなくて、すべてのものの終わりです。個人の終わりは、主にあって眠っているようなものだと聖書は言いますが、目覚めるときは、すべてのものの終わりでもある復活の時に結びついているでしょう。悲観的な終わりとしてではなく、主にある新しい始まりとして、その時を考えてゆきたいものです。

マラナ・タ

人々が世界に何が起こるかとおびえ、恐怖や不安で気を失うような時にも、「身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ」(ルカ21:28)と主は言われました。それは救いの完成の時であり、朽ちるものが朽ちないもの、輝かしいものに復活する時だからです。いたずらに恐れるのではなく、また逆にいたずらにその時のことだけを慕い求めて、現在をおろそかにしてもなりません。終わりをもたらされるのは、私たちの主です。いま主によって召され、委ねられている課題を、しっかり果たしながら、主の再臨の時を待ち望んでゆかなくてはなりません。

ルターは「たとえあしたの世界の終わりであっても、きょう私はりんごの木を植える」と言ったと伝えられます。もし明日が終わりなら、きょう木を植えてもものの用に立ちません。しかしその言葉のように、いまなすべきことをしっかり果たしながら、私たちがまた初代の信仰者たちと同じように、「マラナ・タ」(主よ、来てください)(1コリント16:22, 黙示録22:20)と言い交わしてゆきたいのです。

※世界がいつかは終わるといふ見通しと主が再び来られる終わりの日を待ち望むこととは、どのように違うのでしょうか。

(12) 弁護者、真理の霊

弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。(ヨハネ14:26)

聖霊は、聖徒の交わり、ないしは公同の教会、罪のゆるし、からだの復活、および永遠のいのちによって聖化を成就なさるのである。つまりそれは、聖霊がわれわれを第一にその聖なる交わりの中に導き入れ、教会のふところにおき、教会をとおしてわれわれに説教し、こうしてキリストのみもとに伴われるということである。

(ルター・大教理問答書)

神の、聖い霊

使徒言行録2章参照

神はもともと霊的であって、私たちが経験するこの世のものとは違います。「神は霊である」(ヨハネ4:24)のです。しかし、聖霊あるいは神の「霊」といわれるとき、神がことに被造物である私たち人間の心に働きかけてくださる働きが考えられています。もちろん世の初めから、そういう働きかけがあったに違いないのですが、新約聖書ではイエスの誕生に際して、またそのいろいろな出来事のために、霊の働きかけがあったことを示しています。しかしそれが主イエスの出来事を私たちの心に教え、信じさせる働きをするように現われたのは、聖霊降臨の出来事が契機でした。聖書は人間の霊的高揚や、死後の霊的存在、さまざまな霊の存在やその世界などについて語るではありません。もっぱら神の霊の働きかけを示します。たとえばほかの霊的存在が考えられたとしても、それが問題にならないほど神の霊が力強いからです。ほかの霊や霊の世界を考える必要がないので、聖書の考えはむしろ現実の、物質的な存在を重く

見、それを通して働く神の霊をたたえます。しかし、聖なる神の霊は、私たちの心に働くときでも、私たちの心理状態の中で捉えきれるものでなく、いつも「神の霊」として、人の理解や働きを越えています。

弁護者、真理の霊

聖霊は私たちが見ることも、左右することもむずかしい「風」にたとえられたり（ヨハネ3:8）、すべてのものを焼き尽くす「火」にたとえられたりします（使徒言行録2:3）。人が捉えることのできるものではなくて、むしろ人を捉え、導く神の霊です。主イエスは聖霊を「弁護者」、また「真理の霊」と呼ばれました（ヨハネ14-16章）。

弁護者というのは、私のそばにいて、私のために語ってくれるものというほどの意味です。外にむかって語るときには、弁護であり、私にむかって語るときには、慰め手、助け手となります。そこで聖霊は「助け主」とか「慰め主」ともよばれる時があります。真理の霊と言われているのは、一般的な真理というよりも、神が真実でありたもうことを示す力だということです。それだけでなく、聖霊は私たちに力を与え、主の証人として働かせます（使徒言行録1:8）。教会は、この聖霊の働きによってなり、また私たちに聖霊をもたらす通路でもあります。

聖霊の働き

ヨハネ14章、16章参照

その働きについては、ヨハネ福音書の中に、次のように教えられています。

1. 主の願いによって、父のもとから遣わされる。
2. 聖霊はつねに私たちとともにいてくださる。

3. 聖霊は主が語られたことを教え、思いおこさせる。
4. 聖霊はイエスについて証しをし、主に栄光を与える。
5. 聖霊は神と、その前にある人間の罪の実態を明らかにする。
6. 聖霊はあらゆる真理に導いてくれる。

小教理問答は、私たちが主のもとにやって来て、主イエスを信じること自体、私たちの考えや決心によるのではなく、聖霊の導きによることを告白しています。

聖霊の賜物

聖霊の働きの結果として、私たちは主イエスを知り、信じ、それを言い表し、主と共に歩む生活をするようになります。聖霊によってきよめられる歩みに入ります。その結果、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制などの実をむすぶようになります（ガラテヤ5:22）。私たちの力を超えた神の霊の働きですから、私たちがその結果だけを求めても、得るわけにはゆきません。しかも同じ聖霊がいろいろな形で働き、さまざまな賜物を与えてくださいます（1コリント12:4以下）。

特定の賜物や同じような体験だけを基準にして、ほかの人への聖霊の働きを考えはかることはできません。いわゆる「霊的体験」を強調するとき、私たちはいつの間にか人間的な要素を入れて、特別な体験だけを聖霊の働きとする傾向になりやすいものです。たしかに聖霊は、私たちの思いを超えた導きを与えられます。それは大きな恵みです。しかし、いつでも、だれにでも、同じような体験が与えられるとは限りま

せん。聖霊の働きの第一は、人を教会の交わりにつれてくることだと大教理問答書は述べています。私たちはすでに、それぞれその働きかけを受けて来たに違いありません。特別な自分の体験により頼んで、高慢な気持ちになったり、過去の出来事に執着しているだけなら、それは危険なことになります。そして聖霊が私たちをきよめる働きをしてくださるのは、日ごとに教会をとおし、終わりの日に至るまでの歩みの中においてにほかなりません。

神からの霊を受ける

神からの霊かどうかを判定するかぎは、「イエス・キリストが肉となって来られたということ、公に言い表す」かどうかにあります(1ヨハネ4:2)。その聖霊を受けるために、私たちが神の霊をコントロールするようなことはできません。しかし、使徒言行録は、聖霊が与えられた時の状態について、いくつかの例を示しています。

信徒言行録1:14参照

第一に、五旬祭の日に聖霊を受けた最初の教会の人々は、主の約束を信じて祈り待っていました。

同10:44参照

第二に、使徒たちがキリスト・イエスを証しする説教を聞いていた人々に、聖霊が与えられました。

同19:6参照

第三に、主イエスの名による洗礼を受け、手を置いて祈られたとき、彼らに聖霊がくだりました。

聖霊は、神のみこころにかなう時と所で働かれますが、特にみことばと聖礼典は、神によって与えられた聖霊の通路です。教会そのものも、聖霊がくだることによって生まれた交わり

※聖霊と人やものの精霊（しょうりょう）とはどのように違っているのでしょうか。
※聖霊はどのようにして、私たちに与えられるのでしょうか。

であり、聖霊の働く場所です。「聖霊を受けなさい」（ヨハネ20:22）と弟子たちに霊を吹きかけてくださった復活のイエスはまた、天の父が「求めて来る者に聖霊を与えてくださる」（ルカ11:13）と保証しておられます。

(13) 父、子、聖霊の神

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。(2コリント13:13)

公同の信仰とはこれである。すなわち、われらは唯一の神を三位において、三位を一体においてあがめる。(アタナシウス信条)

父、子、聖霊のみ名 により

教会の礼拝式文は、「父と子と、聖霊のみ名によって」始まり、同じみ名による祝福をもって結ばれます。洗礼がほどこされるのも、このみ名によっています(マタイ28:19)。神はイエス・キリストの父なるお方であり、主イエスはこの神こそ私たちの父でもあることを示されました(マタイ5:45, ヨハネ20:17)。しかも、このイエスを神のみ子、キリストと告白できるのは、人の理解や知識をこえて、天の父が私たちに現わしてくださるからであり(マタイ16:17)、聖霊の働きかけによります(1コリント12:3)。主イエスは、自分を見たものは父を見たのだと言われ(ヨハネ14:9)、ご自分が父と一つであることを強調されました(ヨハネ10:30)。このような主の教えをほんとうに理解させるのは、聖霊の働きにほかなりません。そしてその聖霊によって、私たちも神の子とされ、神を「アッバ、父よ」と呼ぶことが許されます(ローマ8:15)。アッバというのは恐らくイエスご自身が用いられた、父への親しい呼びかけです。神はそのような仕方で、私たちに近づいておいでになります。そのようなあり方を、教会では古くから、父、子、聖霊の三位^{さんいったい}一体の神という言い方で、表してきました。

唯一の、三位一体の神

父として、子なるキリストとして、また聖霊として、私たちに働きかけてくださる神は、唯一の神であります。「我らの神、主は唯一の主である」(申命記6:4)というのは、旧約時代からの基本的な信仰です。三位一体の神というとき、この唯一の神を信じる信仰が三つの神々を信じるように変わったというのでも、唯一の神がただ仮に三つの姿で現われるというのでもありません。三つのあり方、すなわち位格を持ちながら、ひとりの神であられるというのです。むかしから、例えば水が液体の水として、また固体の氷として、さらに見えない水蒸気としてありながら、しかも同じ水であるという現象や、一つの太陽が光や熱によって私たちに働きかけ、またそれによって太陽を見ることができるといようなことに例えられてきましたが、そのようなことで説明し尽くすことはできません。どのような理屈で結び合わされているのかわかりませんが、生ける唯一の神は父と子と聖霊という三つの位格によって私たちに対しておられるのです。神は永遠の神であると同時に、私の神であろうとなさいます。そして子なるキリスト・イエスにおいてご自身を現わされます。このイエスを、時代を超え、場所を越えて私の救い主として仰ぐのは、聖霊の助けによります。私の信仰が徹底的に神の助けによることの告白が三位一体の神の信仰です。

一体としての働き

使徒信条は三つの部分に分けることができ、それぞれ父なる神、子なるキリスト、聖霊の働きについて告白しています。しかし、ルターの教理問答における表題は、「創造について」「罪

のゆるしについて」「きよめについて」と、神の私たちへの働きかけを示しています。そして、天地の創造について考えても、聖書から見ると、それはたんに父なる神が働かれたというわけではありません。すべてのものは、み子によって、み子のために造られた（コロサイ1:16）という表現もあるのです。聖霊は、混沌の初めから、すべてのものの上を動いていた力であり（創世記1:2）、人間を生きたものにしたものでもあります（同2:7）。聖書の霊という言葉は息や風と同じ語からなっています。ですから、代々の信仰者たちは。「造り主なるみ霊よ、来てください」と歌い継いできました（教会讃美歌120）。同じように、罪のゆるしの救いのみわざにおいても、きよめの働きにおいても、父、子、聖霊はいつも共に働いておられます。決してそれぞれはっきりした分業をしておられるわけではありません。父、子、聖霊の間に上下、従属の関係があるわけでもないのです。

救いのための働き

イエス・キリストの救いは、父なる神の独り子の犠牲という出来事でした。そしてその主イエスを信じるのも、聖霊の助けによるのです。自分が思い切って主イエスを言い表したつもりでも、イエスはペトロに「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現わしたのは、人間ではなく、わたしの天の父だ」と言われました（マタイ16:17）。パウロは「イエスは主である」と告白できるのは、聖霊の導きにほかならないと言っています（1コリント12:3）。言い換えれば私たちの信仰の告白も、神ご自身の恵みの働きによるのです。そういう徹底的な

神の働きを、三位一体の信仰は言い表しています。三位一体の神の告白は、聖書に「三位一体」という表現があるわけではないのですが、パウロの伝えている祝福の言葉を始め、いろいろなところで見ることができますし、教会でも三角や三つ葉などいろいろなシンボルで現わしてきました。聖書が示している神の三重のあり方に対応した信仰の表明です。

讚美し、告白する 中で

三位一体の教えは、人が神の存在を分析して得た論理ではなくて、生ける神との交わりの中で、神をこのように三位において礼拝せずにはいられないという信仰的な思いに基づいています。

宗教改革者ルターの教えをまとめた書物の中に、「神を神とせよ」という表題のものがありますが、それは彼の信仰を表明したすばらしい標語のひとつだと言えます。神が神でありたもうことの中には、私たちが理解できない神秘や深さがあります。しかも三位一体の神の告白は、たんに不可解だというのではなくて、恵みの働きかけがこのように神から来ることの告白であるのです。

※礼拝式や教会のシンボルの中で三位一体の神を示しているものを考えてみましょう。

(4) 神のみわざとしての礼拝

自分の体を神に喜ばれる聖なるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。(ローマ12:1)

すべての礼拝において、最も大きくて、最も重要な部分は、神のみことばを説教し、教えることである。

(ルター・ドイツミサと礼拝の順序)

知っている方を 礼拝する

「礼拝」という日本語は、もともと身を折りかがめて拝むという意味ですが、キリスト教の礼拝は、自ら語りかける神が相手です。みことばを聞き、言葉をもって讚美し、祈ります。神の恵みのことばを受け、それに感謝と私たちの応答をささげます。何となく宗教的な感情を満足させるのでも、私たちの願いをかなえてもらうための、手続きというのでもありません。「あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している」(ヨハネ4:22)とイエスは言われました。聖書をとおし、イエス・キリストにおいてご自身を現わし、私たちに語りかけてくださるお方を礼拝するのです。

人の言葉をとおして

神が語りかけられるのは、何か特別の霊的高揚の中でインスピレーションを与えられるというのではなくて、福音を証する人の言葉をとおしてなされます。説教者や礼拝の司式者の言葉をとおしてというだけでなく、信じる人々の言葉や讚美をとおしても語りかけてくださいます。個人的な礼拝においてさえ、聖書のことばや私たちの祈りの言葉があります。そのような人格的な交わりは、共同の礼拝の中で、お互いのみことばを取り次ぎ合うことをとおして、最

もよく具体化します。「^{ひと}ひとり^よ善がりの礼拝」(コロサイ2:23)にしてしまっていて、自分で自分の罪をゆるしたり、自分の心の中だけで、堂々巡りをしてしまっただけではなりません。神との交わりは、こうして礼拝する者たち相互の間に、神による交わりを形づくらせます。

教会の共同の礼拝は、このような意味で、私たちの信仰生活の中心となります。そして、そこでたとえ初めて逢う人たちの間であっても、それぞれ自分と神さまとの関係を持っている、あるいは持とうとしている者だと認め合うことができます。こまかいことは知り合っていないなくても、お互いに一番深い人間の思いの中での共通の基盤を確認し合えます。

礼拝することは 仕えること

使徒言行録17:25参照

聖書の原語では、「礼拝する」という言葉に「仕える」という意味の言葉が一番よく用いられています。奉仕するとか、仕えるというのは、私たちが神さまに何かをお供えしたり、してあげないと困られるとか、怒られるとかいうものではありません。「仕えられるためではなく仕えるために」来た(マタイ20:28)と言われた主によって、まず私たち自身が仕えていただき、罪を洗い清められ、新しいいのちを与えられなくてはなりません。そののち今度は、仕えようとしておられる主のみわざに積極的に参加し、従ってゆくものとなってゆくのです。そのような力と方向づけを、礼拝によって与えられます。

神のみわざとして

礼拝において私たちは、神の恵みの語りかけを聞き、ゆるしと新しいいのちを与えられま

す。残念ながら、この世に生きる限り、私たちはすぐまた自分の勝手な考えにとらわれ、間違った方向へ進んで行こうとしますから、いつも繰り返し主のみわざの中に帰ってくる必要があります。そして神の語りかけに応じて私たちがする応答も、神ご自身の導きによってすることができます。それはペトロの信仰告白の場合と同じです（マタイ16:16-7）。私たちの信仰告白や讚美をも、神ご自身が導いてくださるのですから、私たちはひたすら神のみわざが働くようにさせ、それに与かってゆくことを考えなくてはなりません。しかしそれは、私たちが風まかせ、波まかせにただよって、何もしていないことではありません。自分の意識としては、一所懸命応答しようと努めていながら、しかもそれも、主が助けてくださることにほかならないと告白するのです。

安息日から主日へ

主イエスは、安息日を外的にだけ守ることの愚かさを指摘し、ご自身が安息日の主であると宣言なさいました（マタイ12:8）。そして外面的な安息日の律法にはこだわられませんでした。キリスト教会はイスラエルの土曜安息に代えて、日曜日を「主日」としてその日に礼拝を守るようにしました。「週の初めの日」（マタイ28:1）日曜日は、主イエスの復活の日であると共に、神の創造の開始を覚える日であり、また聖霊が教会を始めてくださった日でもあります。神のみわざを記念するときです。ルターは日曜日や祝日に労働を休むのは、体の休息のためというだけでなく、自分をむなしくして、神さまに働いていただくためでもあると言っています。

なくてはならぬもの

主イエスの来訪を迎えて、もてなしのためにせわしく働いていたマルタに対して、主は「必要なことはただひとつだけ」すなわち、みことばを聞くことにほかならないと戒められました(ルカ10:42)。私たちも、自分が神さまに何かをしてあげられる力をもっているとか、資格があるというのではなく、ひたすら神のことばを必要としているものとして、礼拝に与かることが必要です。神さまとの人格的交わりが礼拝なのですから、何よりもそのみ心を聞いてゆく姿勢が求められます。

聖書の言葉をとおし、また讚美にも祈りにも、恵みのみことばを聞いてゆくことができますが、ことに聖書の説きあかしである説教によって、みことばが伝えられます。それはただ聖書の出来事の説明や、信仰生活の戒めというわけではありません。私たちへの神さまの語りかけです。そこで提供される内容は、主イエス・キリストご自身です。自分の考えと一致していると思うところだけを聞いたり、表面的な感動に動かされるのではなく、たしかな福音を聞き分けてゆくように努めなくてはなりません。

砕かれた心

※私たちが教会の礼拝に参加するのは、どういう意味を持っているのでしょうか。
※教会の礼拝が自分にとって助けとなっていること、問題と感ずることはどういうことでしょうか。

神に向かって開かれた心に、何より大きな主ご自身という賜物が約束されます。私たちは神の恵みを得るための代償として、何かを献げるわけではありません。むしろ砕かれた悔いる心(詩編51:19)こそ神の恵みを受けるのにふさわしい献げ物です。それは私たち自身を献げることでもあります。

(礼拝の諸側面については改めて考えます。)

(15) 恵みのしるしとしての礼典

ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。(使徒言行録2:41, 42)

われわれは常に教えて「聖礼典をはじめ、神の設定なさるいっさいの外的事物は、くるみの殻を見るように、粗い外観に従って眺めてはいけない。神のことばがいかにその中に含まれているかを見るべきである」と、言っているのである。(ルター・大教理問答書)

神の恵みのしるし

聖礼典は、サクラメントともいいます。

私たちは、神の恵みのみことばを信仰をもって受け入れます。しかし、私たちの理解や確信は不確かなもので、いつも強められ、深められる必要があります。それに対して神のみことばは確かで動くことはありません。その確かな恵みの保証として、またしるしとして、聖礼典が与えられています。それは決して何かを象徴するものというのではなく、具体的なことを起こす出来事としてのしるしです。教会はその初めから、そのような神の恵みのみわざとしての洗礼と聖餐を守ってきました。洗礼は、私たちが神の恵みの約束に入れられていることを保証し、聖餐はその約束の中に生きる力を与えます。

キリストに合わせられる

洗礼はただ私たちの身についている汚れを洗い落とすしるしではありません。もともと水に浸けることは死を、水から引き出すことは復活をあらわし、洗礼によって私たちはキリストの死と復活にあずかるのです(ローマ6:4, 5)。同じように、聖餐の杯はキリストの血(新しいいのち)にあずかり、パンはキリストのからだに合わせられることです(1コリント10:16)。い

ずれも、主イエス・キリストの十字架の死と復活が、ほかならぬ私の人生に関わりをもち、それに重なってくるように、主ご自身を受け入れることを示しています。それによって、私の罪がゆるされ、新しいのちに生きることがゆるされます。神のことばがそのことを私たちのうちに起こすのですが、礼典はさらにそれを私たちの体験の中で保証し、たしかにします。

新しいのちへの 出発

ユダヤ教の中にも洗礼と同じような儀式がありましたし、バプテスマのヨハネも悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。洗礼を授けるというのは、もともと水の中に体を沈めるという意味で、そのギリシャ語である「バプテスマ」も、そのまま用いられています。外面的な行為としてなら、わが国にもよく似た儀式がありました。けれども、キリスト教会の洗礼は、それらのものとは違った意味をもっています。

第一に、それは主のご命令です（マタイ28:19）。形は同じようなものがあっても、これは人の約束事ではありません。

第二に、それは外面的な汚れを洗い落とすというのではなく、心の汚れを洗い、罪がゆるされることを意味しています。私たちが自分で汚れを洗うというのではなく、神が働いてくださいます。

第三に、それは罪や汚れを洗い流して、もとの無垢な状態に戻るというのではなく、キリストと共に死んでキリストと共に復活することを表わします。私たちは、そこで新しい永遠ののちへと生まれ変わることがゆるされます。

「聖霊と火」による洗礼とか（マタイ3:11）、だれでも「水と霊とによって」（ヨハネ3:5）新し

く生まれるとか言われるのは、まさにそのことを意味しています。用いられるのは水ですが、それによって古い私が溺れ死に、焼き尽くされ、聖霊によって新しいのちに生かされるのです。

第四に、このような神の約束は確かですから、洗礼を何度も繰り返す必要はありません。神さまの側は確かでも、私たちの側は、不安定でしばしば迷い出たりしますから、日毎に洗礼の約束に立ち返り、それをまた新しい出発点としなくてはなりません。

この洗礼の約束にあずかることによって、私たちはキリストに属する神の民とされ、教会の一員とされます。

信じて洗礼を受ける

「信じて洗礼を受ける者は救われる」(マルコ 16:16)と主は言われました。私たちは、いろいろな人の助言や導きに励まされながらも、究極的には自分が信じて洗礼を受けます。それは、完全な信仰に到達したからではなく、神の助けによって歩き始める出発点であるのです。

幼児は自分で信仰を告白できませんが、信仰をもった親によって神に献げられ、信仰者の交わりの中に支えられて、洗礼を受けます。信仰によって育てられ、それぞれの成長の段階に応じて自分の信仰を表明できるようになってゆかなくてはなりません。

主の晩餐

主イエスは、十字架につけられる前日の夕、弟子たちといわゆる最後の晩餐を共にされました。それは、イスラエルの過ぎ越しの祭りと関連していました。イスラエルの民が神の導きに

よって、エジプトから脱出した出来事を記念して守ってきた行事です（出エジプト12章）。主は神の民の新しい出エジプト、すなわち罪からの脱出のために、自らを犠牲とされました（1コリント5:7）。そしてご自身を与えてくださるしるしとして、パンとぶどう酒を、自分のからだ、自分の血として弟子たちに分け与えられました（マタイ26:26以下）。そのことを覚えて、教会は主の晩餐を聖餐式として行ないます。復活の主が弟子たちに現れて共に食事をし、彼らの目を開いてくださったように（ルカ24:30, 31, ヨハネ21:13）主が今も私たちと共にいて、ご自身を与えてくださいます。主は人々の「罪がゆるされるように」（マタイ26:28）と、ご自身を与えられました。罪のゆるしがあるところには、新しいいのちと祝福があります。それにつらなるすべての者が、主を中心に結びつけられます。

神の語りかけ

洗礼における水、聖餐におけるパンとぶどう酒はあくまで水であり、パンであり、ぶどう酒にほかなりませんが、しかし神の民の礼拝の中で、それを通してみことばが語られ、受け取られるとき、それは神ご自身のみわざとなり、それによって主の恵みが確かに分け与えられます。神のことばは魔術的に働くのではなくて、私たちに向かってイエス・キリストの救いをもたらします。それを信仰をもって受け取るのです。神さまへと方向転換し（悔い改め）、罪のゆるしを受け、新しいいのちにあずかろうとする人は、礼典の保証をも受けることができます。（洗礼、聖餐については改めて学びます。）

※私たちはどうしたら、礼典を受けるのにふさわしくなるのでしょうか。

(16) 祈り

何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。(フィリピ4:6)

あらゆる苦難にさいして神に呼びかけること、これが祈りである。これは神がわれわれに要求なさることで、われわれの気ままに任せられていることではない。われわれがキリスト者でありたいならば、祈るべき義務があり、また祈らずにはおれないはずである。

(ルター・大教理問答書)

神との対話

祈りは私たちの神さまとの対話です。自分の心の中でひそかに感じていたり、こうあって欲しいと祈念しているだけでなく、信仰の相手である神さまと語るのです。しかし、それはただ私の願いを並べて注文するのではなく、むしろ神さまが何を語られるのかを聞き、そのみ心が私たちを制圧してしまうことを求めます。そのために心を静かにし、また事ごとに祈ってゆくことが必要です。恵みとゆるしの神さまとの対話ですから、完全な模範答案をたずさえてゆく必要はありません。神さまによって正されたり、導かれたりするのが大事です。そのような祈りは、信仰の生活態度そのもの、信仰者のいのちの呼吸でもあります。

主イエスの祈り、 主による祈り

主イエスは、いつも祈っておられただけでなく、ご自身の生涯の大切な転機には、特別に祈られました。洗礼を受けたとき(ルカ3:21)、山上の変容のとき(同9:29)、また十字架を前にしたゲッセマネで(マタイ26:36)、ひたすら祈っておられたことが記されています。そして弟子たちにも祈ることを教えられました(ルカ11:1)

-13)。父なる神が、切に求める者に必ず聞いてくださり、求めてくる者に聖霊をくださるにちがないと保証してくださいました。また主イエスのみ名によって求めるなら、必ず与えられると約束なさいました（ヨハネ15:16, 16:23）。それはただ、主のみ名を呪文のように唱えたらよいというではありません。主イエスによって、私たちが神に祈ることのできる基盤としての、新しい神関係をつくってくださったということです。主が私たちの祈りの手本になってくださっただけでなく、私たちが祈ることができるようにしてくださいましたのです。

み心のままに

弟子たちが、どのように祈ったらよいかを尋ねたとき、主はいわゆる「主の祈り」を教えてくださいました。主イエスは父なる神と親しい交わりをもっておられました。私たちが神さまに「父よ」と呼びかけることができるようにしてくださいました。しかし、親しい関係の中で自分たちの求めを述べる前に、主の祈りはまず私たちが神さまのみ心が実現するように、しかも私のうちにも実現するようにと祈るべきことを教えてくださいました。「わたしの願いどおりではなく、み心のままに」（マタイ26:39）というのが、ゲッセマネの園で主ご自身が祈られたことでありました。

何を祈るのか

しかし同時に、この父なる神はすべてを造り、愛し、支えてくださる神です。私たちは自分で祈りの内容をえり分け、精神的で恰好のよいこと、敬虔らしく思えることばかりを祈るではありません。衣食住についても、金や生活

のことも、夫婦や子どものことも、政治や平和、気候や健康、教育や友だちのことなど、あらゆることについて祈り、それらのことの中で、神のみ心が何であるかをたずねてゆかなくてはならないのです。

たずね求めることばかりではありません。私たちはすでに頂いた恵みを感謝し、み名を讃美します。私たちの罪の告白とゆるしの願いも、また自分のことばかりでなく、隣人のため、すべての人のための執り成しも、祈りの内容です。

なかなか祈り気持ちが起こらないときも、祈れるようにと祈ります。私たちがほんとうに求めなくてはならないことは、自分自身を聖書の光のもとにさらして見るとき、おのずから明らかになります。

ひとりで祈る

主は偽善者のように祈るのではなく、自分の部屋で戸をしめて祈るように教えられました(マタイ6:6)。忙しい日常生活の中でも、ひとりで自分の人生を思い、神さまとの対話の時をもつことは、たいへん大切です。口に出しても、出さなくても、ただ瞑想するだけでなく、相手である神さまに、言葉をもって語りかけます。幼稚な言葉でも、整った形でなくても、少しもかまいません。ただ自分の勝手な注文を出すだけでなく、神さまのみ心を考え、恵みを見だし、感謝することを忘れないようにしましょう。聖書、ことに詩編の言葉や、讃美の歌、先輩たちの祈りも、私たちが祈る祈りの助けとなります。人に見せびらかす必要はありませんが、ひとり祈る姿は、また最も深い証しでもあります。

共同で祈る

神さまに信頼する人々が心を合わせて祈るなら、父なる神はきっとそれをかなえてくださると、主は保証されました（マタイ18:19）。地上のキリスト教会で、共同の祈りほど大きい力はないし、これこそ何にも負けない力であると、ルターは述べています（善きわざについて）。祈禱会だけでなく、主日の礼拝も、そのような祈りと言えます。そしてそこでも、私たちの側からの願いだけでなく、神さまからの語りかけを聞かなくてはなりません。共同の祈りの中でこそ、互いに執り成し合い、また世のために祈ることをも覚えてゆかなくてはなりません。

絶えず祈りなさい

旧約聖書のダニエルは、一日に三度神の前に祈ったとされるされています（ダニエル6:11）。初代教会の人々は、それに基づくイスラエルの民の習慣を引き継いだようです。ルターの小教理問答書は、朝夕の祈りと食前、食後の祈りの例を示しています。神さまは、苦難の日に自分を呼ぶなら、お前を救うと約束してくださいます（詩編50:15）。しかし、ただかなわぬ時の神頼みというのではなく、絶えず祈っていることが必要です。

神さまはどんな祈りも聞いていてくださるに違いありませんが、私たちが具体的に求めるとおりになるかどうかは、神さまにおまかせしなくてはなりません。パウロが伝道の働きのために、自分の病気がいやされることを特別に祈り求めた時も、そのとおりに聞き入れられないで、もっと深いみ心が示されているのです（2コリント12:8, 9）。

（主の祈りについては改めて学びます。）

※キリスト教でいう祈りは、一般にいう祈禱や祈願とどのように違うのでしょうか。

(7) 「主のもの」としての生活

あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。(1コリント6:19, 20)

こうして私は主のものとなり、み国において彼のもとに生き、永遠の義と純潔と救いとの中に主に仕えるのです。

(ルター・小教理問答書)

キリストのしもべ

主イエスによって^{あかひ}贖われたということは、いわば身代金が支払われたということです。むかしの奴隷売買のイメージから取られた表現なのでしょう。もし身代金が支払われたら、その人は支払った人を新しい主人としなくてはなりません。新約時代にはまだ、奴隷であるか自主の人であるかが、社会的にはたいへん大きな立場の相違となりました。しかもパウロは、自分が「イエスのしもべ(=奴隷)」であると名乗り、それを誇りにしています。他方主イエスは、もうあなたがたをしもべとは呼ばない、あなたがたは私の友だと、言われました(ヨハネ15:15)。このイエスを私たちの主人とすることは、大きな恵みであると共に、責任のあることです。主人のいる神の国に共に生きることができると同時に、この主人にふさわしい生き方をしなくてはなりません。

行って実を結ぶ

よい木はよい実を結ぶと、主は言われました(マタイ7:17)。よい木である主イエスにつながっている者、主を自分の主人とする者にふさわしい生き方はどういうものでしょうか。主イエ

スによって与えられた救いは、それを得るために努力して正しい生活をする必要はなく、信仰によって与えられます。しかし私たちは、与えられた救いにふさわしいものになってゆかなくてはなりません。

主に癒された十人の重い皮膚病の人たちの中で、主のもとに帰ってきて、神を讃美し、主に感謝したのは、たった一人だけでした（ルカ17:18）。

自分もゆるされたのだから、ほかの人に対してもゆるすように、主は命じられました（マタイ18:33）。

いやされた人に、再び罪をおかさないようにと、主は戒めておられます（ヨハネ5:14）。

主のあり方にならって、互いに仕え合い、愛し合うようにと、イエスは励ましてくださいました（ヨハネ13:14、15:12）。

主イエスの救いは私たち自身の安心に止まらず、父なる神が今もなお働いておられるように私もまた働くと言われた主（ヨハネ5:17）にならい、よい実を結ぶために、これまでの生活から立ち上がってゆくよう、私たちがかりたてます。

キリストのからだとして

主を信じる者は、キリストをかしらとするからだに連なる部分として受け入れられます。それは主のいのちにあずかるというだけでなく、それだからこそ、主の手足として働くことも許されるのです。しかし、手足はしっかりとからだのいのちにつながっており、かしらの意志に従って働かなくてはなりません。手足が考えたように動かなかったり、勝手に動いたのでは困

ります。

主ご自身、そのような信じる者との結びつきを、ぶどうの木と枝の関係にたとえられました(ヨハネ15:5)。みことばによって、いつも幹に結びついていることが、第一に必要です。そしてよい実を結んでゆきます。結ぶことのできる実には枝の実ではなくて、ぶどうの木の実はです。古い枝にではなくて、新しい枝にこそ、いつも実がつかます。

福音にふさわしい 教会生活

パウロは「福音にふさわしい生活を送りなさい」(フィリピ1:27)と勧めました。「生活をする」というのは、ただ自分ひとりが日を過ごすというのではなくて、人々との交わりの生活を示しています。それは第一に、私たちが教会の交わりの中で生きるようにということです。キリストのからだとしての教会に、しっかりつらなってゆくことが必要です。現実の教会は、人間の集まりでもありますから、決して理想的なものではありません。しかし、その中で共にみことばを聞いてゆきます。不完全であるだけ、私たちがなすべきこともたくさんあるのです。

福音にふさわしい 社会生活

交わりの生活は、教会においてだけでなく、第二には社会における生活をも含んでいます。バプテスマのヨハネは、自分は一般の社会生活から離れて、荒野の中で生きていましたが、それぞれの人々が置かれた社会生活の中で、正しく、愛をもって生きることを求めました(ルカ3:11-14)。主イエスは、さらに積極的に、困っている人の隣人となることを求められます(ルカ10:37)。そして弟子たちをこの世から離

れさせるのでなく、この世の中へと遣わされました（ヨハネ17:18）。特別な生活や職業でなくとも、神が私たちに福音にふさわしい生き方を期待してくださる場所が、どこにでもあります。

社会の生活の中では、いつもクリスチャンの仲間がいるとは限りません。しかし、神が造ってくださった人間同志として、神が求められる正しさを、共に実現してゆくように努めたいものです。そして人間としての深い問題にふれては、いつでも福音を証ししてゆけるように、備えていきたいのです。

福音にふさわしい 個人生活

教会の交わりや社会生活では、無理して自分をりっぱな者に見せようとし、個人生活ではつい本音を出している、というようなことがあります。逆に外の生活では目立たないようにほかの人々といっしょに行動しているが、個人の生活だけは敬虔さを確保しておこうとすることもあります。しかし、神はどの側面でも私たちと共におられます。取りつくろうように努力するのではなくて、私たちをゆるし、導いてくださる神に、全面的に信頼することが必要です。私のりっぱさが誇られるのではなくて、神の愛と恵みが証しされなくてはならないのです。そして私たちの生活のあらゆる面で、神のみ旨を聞いてゆく心構えをもってゆくことが必要です。

このような態度が教会の生活や、社会での歩みに結びついているとき、ほんとうに恵みの福音にふさわしい生き方になってゆきます。

（主のものとしての生き方については、改めてくわしく学びます。）

※主イエスに結びつく者としての生活を考えるとき、自分の生活のどの側面にいちばん注意しなくてはならないことがあるのでしょうか。

(18) キリストのからだである教会

教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。(エフェソ1:23)

キリストについて説教されないところには、キリスト教会をつくり、召し、集められる聖霊はおられず、教会なくしてはだれも主キリストのもとに来ることはできない。(ルター・大教理問答書)

「教会」とは

むかし吉利支丹の時代には、教会は「ゑけれじや」と呼ばれました。呼び出された者の集いという意味のギリシャ語「エクレシヤ」に由来する名前です。禁制後ずいぶんして見つけられた吉利支丹の聴取にあたった役人が、「吉事家」というあて字で書き留めている例もあると言います。イエス・キリストの喜ばしい音信おとずれを中心に行っているという意味では、ふさわしい文字といえるかもしれません。明治の初めに、当時の既成宗教でない宗教の集会所が「教会」と呼ばれました。その頃のわが国での既成宗教は、一般の習慣の中に定着し、主として祭儀が重んじられ、教えを聞く必要もなかったのに、新しい宗教グループではその教理を教える必要があったからと考えられます。もちろんキリスト教は、聖書の福音を教えられ、信仰の告白をしてゆかなくてはなりません。しかし、キリスト教会はたんに教えが説かれるところというだけではありません。たしかにひとり信仰しているという、自分勝手な理解に陥りがちですし、仲間の中では正されたり、支えられたりすることができます。しかし、そういう便宜的なことによるのではなく、信仰者たちは神の国の民として、共に集って来ました。聖書は、キリスト

のからだとして主のいのちに連なり、その働きに仕えるものとしての教会を示しています。私たちは、それにつらなるように、招かれています。

「教会に行く」?

私たちはどうかすると、教会というと「礼拝堂」のことを考えたり、主日の礼拝や集会に参加することを「教会に行く」と言ったりします。しかし、もともと教会はそういう場所の意味ではありません。たしかに、礼拝したり、学んだり、交わりをもつ場所も必要ですし、それを教会と呼ぶのも自然のことだと思えます。しかし、「キリストのからだ」(エフェソ1:23)とか「神の民」(1ペトロ2:9,10)とか呼ばれる教会は、場所というよりはむしろキリストを主と告白する人々の群れを表わします。ですから、教会は「何か」というより「だれか」ときく方がより正しいかもしれません。しかも、ただ多くの人が寄り合っているだけでなく、主イエスをかしらとする一つのからだにたとえられます。いつもいのちのことばを聞いて受けてゆくことが必要ですし、ただ集まっている時だけでなく、それぞれに散っている時も、教会に属している一人ひとりなのです。

「聖徒の交わり」 の実態

教会は「聖徒の交わり」であると、使徒信条は告白しています。しかし聖徒というのは、いわゆる聖人君子のことではありません。聖なる神のものというほどの意味です。信仰によって、主のものにされた人々です。この聖徒、つまり信仰者の交わりは、この世にあってはまだ罪のうちにある人間の交わりでもあります。日

ごとに豊かにこの教会で罪のゆるしを受ける必要のある者どもの集まりにほかなりません。りっぱな、理想的な人々の集まりというよりは、むしろ自分の罪をざんげし、執り成しあい、神のゆるしをもたらし合う者たちのつどいとしての教会の交わりです。

隠された教会

現実の教会は、人間的な汚れも帯びているに違いありません。しかもみことばが宣べ伝えられているかぎり、いつでもそこに神の民がいます。地上の教会の姿とは別に、天上の理想の教会があるというのではなくて、具体的な、あの人、この人を含んだ交わりの中に、神の教会は隠されています。その境界線がどこにあるかは、人には分かりませんし、いつもその線は動いているかもしれません。新しい人々に対して開かれ、広がってゆきますし、私たちも迷い出るかもしれません。それでも神の認めてくださる教会は、具体的な人間の集まりの中にあります。神の教会と具体的な人々の集まりを貫く軸は、みことばの宣教です。神のことばが正しく受け取られるなら、その人々はたしかに神の国に属し、キリストのからだに連なる者とされます。

告白する信仰者

神のみことばを正しく受け取るということは、私たちが正しい信仰の告白をすることに結びついています。一定の地域に住む者や信徒の家庭に生まれた人が、自動的に会員となるというわけではありません。キリスト教的な環境の中に生まれ、育つことは、大きな恵みですが、同時に自分自身で信仰を表明してゆくようにならなくてはなりません。そうするように、私たち

一人ひとりが招かれ、呼び出されています。子どもたちに対しても、そういう導きと教育が必要です。

一つの、公同の、 使徒的教会

「すべての民をわたしの弟子にしてください」（マタイ28:19）という主の命令に従って、世界のあらゆるところに、いろいろな仕方で、教会があります。礼拝や生活の習慣には、さまざまな違いもあります。雪のクリスマスのイメージは、熱帯や南半球では通用しないでしょう。しかし、どこにあっても主イエスをかしらとして、唯一の神への信頼を言い表す限り、一つの教会に属します。普遍的に広がる一つの教会を「公同」の教会と言います。使徒たちが伝えた共通の信仰を保ち、今も伝えているのですから、「使徒的」な教会と呼ばれます。

十字架のしるし

神社と言えば鳥居、お寺と言えばまん字、そしてキリスト教と言えば十字架で表されるのが普通です。地図の上での場所を示すだけでなく、罪のゆるしの福音を示す十字架は、ほんとうの意味で教会のしるしと言えます。しかし、キリストの十字架の出来事を示すだけでなく、主にならってほかの人の重荷を負ってゆくしるしにもならなくてはなりません。教会はキリストの再臨の時まで、この世の中に隠されている神の国の姿でもあります。私たちはこの教会をとおして神の国の民とされます。小さい、みすばらしい、罪にまみれた教会であっても、十字架の福音が保たれているなら、たしかにそこにキリストの教会があります。そのような教会に私たちも属するのです。

※キリスト教会が、信仰者の集団としてもっている特徴を考えましょう。

(19) 私たちの教会

キリストがそうなさったのは、言葉を伴う水の洗いによって、教会を清めて聖なるものとし、しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるためでした。
(エフェソ5:26,27)

神に感謝すべきことに、七歳の子どもも、教会はなんであるかということを知っているからである。すなわちそれは、聖なる信仰者たちであり、羊飼いの声に聞き従う羊たちである。

(ルター・シュマルカルデン条項)

信仰告白の集団

教会はどこにあっても、どんな人々によって構成されていても、正しい信仰に連なっているかぎり、キリストをかしらとする唯一のからだに属しています。しかし、私たちにとっては、礼拝のために一定のところに集まる具体的な交わりが、直接にふれる教会です。新約聖書は、それぞれの場所に集まる神の民の集団を、コリントにある神の教会、ガラテヤにある教会などと呼んでいます。しかし、それぞれの町では、彼らはなお少数の人たちに過ぎませんでした。この交わりは、地縁や血縁を土台にするのではなく、信仰告白を中心にしています。そして信仰によって結ばれる神の一つの民の、それぞれの部分だということができます。その信仰告白のかなめはイエスによる罪のゆるしの福音にほかなりません。

ルーテル教会

私たちの教会は、16世紀のドイツにおける宗教改革の信仰の流れを引く教会です。宗教改革者マルティン・ルターの名で呼ばれたルーテル教会は、いわゆるプロテスタント教会の中心を

なしています。今は「ルター」という表記をしますが、明治時代には「ルーテル」と呼びました。その教会は神の恵みと信仰とを強調し、聖書のみことばに立つことを主張しています。ルーテル教会はドイツに始まって、全世界に広がりましたが、わが国では明治26年の復活祭に九州佐賀の地で伝道が開始されました。わが国における伝道は、まだまだこれから担ってゆかなくてはならない課題です。しかし、世界のプロテスタント教会の約半分を占めるルーテル教会に属しており、私たちの教会も、アメリカ、ドイツ、北欧諸国と密接なつながりをもっています。

教会の使命と職務

教会は、その会員がみことばによって養われるだけでなく、いつもみことばを宣べ伝え、神の愛を証する使命を持っています。かしらであるイエスご自身が、みことばは宣べ伝え、教え、いやし、仕える働きをなさったように、そのからだとされる教会も、そのような主の働きに仕えてゆきます。その使命と働きを果してゆくために、教会には一定の組織や、協力して仕事を分担してゆくための役割が必要となります。しかし、もともと一定の目標達成のために組織されて働く企業体とは違い、みんなの自発的な働きと協力を促して、その働きを広げてゆく運動体と似ています。私たちが参加して力を合わせないで、だれかがしてくれるのを待っていても、なかなか期待のようにはなりません。みんなで教会の使命のために考え、協力することが必要です。

各個の教会で

それぞれの教会は、何よりもみことばを中心としていますから、まずみことばに聞き、みことばを伝えるために、みことばの職務である牧師が必要となります。それと共に教会の働きを整え、計画し、支えてゆくために、教会員全体が総会で考えます。その方針に基づいて具体的な方法を考え、またいつもしておかなくてはならない運営の働きは、役員会や必要な委員を選び、それを中心にしてなされます。教会学校の教師や、壮年会、婦人会、青年会などの委員、あるいは地域ごとの交わりの世話役、さまざまな奉仕の働きの中心となる人々など、それぞれの教会で必要な働き人があります。会堂をはじめ必要な建物の建設維持、掃除、諸集会の案内や広報、週報などの作成と配付、発送、受け付けや会堂での具体的な案内をすることなど、たくさんの仕事が教会にはあります。個人個人の証しや伝道も、教会の交わりが中心にないと、ひとりよがりになる危険があります。具体的な働きは、地味で目立たないことが多いのですが、それぞれ必要な仕事ですし、一緒に働きたずさわることで、お互いの交わりや理解を深めることにもなります。何より主ご自身の働きの一端にあずかってゆくことができるのです。

教会のいっさいの働きに必要な資金も、会員の献げものによって、まかなわれます。いろいろな働きも、知恵も、時間も、お金も、私たちに与えられる恵みへの応答として献げられるのです。

より大きな組織

各個の教会での働きを支え、考えてゆくと共に、協力して共同の働きをしてゆくために、地

区、教区あるいは全体の教会の中で、さまざまな課題と分担がなされます。自分たちの地域はもちろん、たくさんのまだ伝道されていない地域への働きかけを考えてゆかなくてはなりませんし、いろいろな側面で助力を必要としている教会もあります。それは国内に限ったことではありません。

たとえ自分たちの教会の現状が、外の働きを応援するほどでなくても、そのようなさまざまな面での働きを覚えて、できるだけの協力をし、てゆくことが必要です。私たちのからだは、うまく利用することができない時から、手足もっています。無駄なようでもそれを動かし、働かせてゆくうちに成長してきました。たとえ幼い手足でしかないようであっても、働かせてゆくことが必要なのです。

より大きな輪

国内のルーテル教会の中だけでなく、私たちは交わりをもっている各国の教会とのいろいろなレベルでの結びつきと、協力して実行できる働きを考えてゆかなくてはなりません。ルーテル教会の間だけに限らず、地域の中でも、あるいはまたもっと広い面でも、諸教会と協力して働ける分野があります。人々への奉仕のわざにおいてはことに、教会のわくを越えて力を合わせる必要も生じます。信仰による立場は自分たちの中にしっかりもっていることが必要ですが、神さまによって造られた人間同志として、協力して行かなくてはならない面も少なくありません。

(教派の問題やこの世での奉仕の働きなどについては、改めて課題として学びます。)

※私たちの教会は、どのような場所に、どのような歴史をもち、どのような働きをしているのでしょうか。

(20) 永遠の生命

神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。（ヨハネ3:16）

こうして、私は主のものとなり、み国において主のもとに生き、永遠の義と純潔と救いの中に主に仕えるのです。それは、主が死からよみがえり、永遠に生きてすべ治められるからです。

（ルター・小教理問答書）

人のいのちと死

神が土の塵、つまりこの世界と共通の物質で人間を造り、いのちの息を吹き入れると、人間が生きたものとなったと、創世記は記しています（2:7）。それは私たちのいのちが神によるものであること、神さまとの交わりのうちにあつてこそ、ほんとうの生を生きるのだということを示しています。ただ外面的な現象として生き延びているというだけでなく、そこでこそ生き甲斐と使命をもって、いきいきと生きるのです。しかし、現実の人間は、さまざまな面での進歩発展にもかかわらず、苦しみや死からまぬがれることのできない存在です。生まれた時から、死とただ一步の距離にあります。死は必ず私たちにおとずれてきます。しかし、生あるものは必ず死ぬというだけでなく、聖書は人の死が罪と結びついていることを教えます。神さまとの関係をいきいきと持っている人は、幼くても老いても、肉体的に生きていても死んでも、神に生きるのです。主イエスによって罪にゆるしを与えられることは、同時に神に生きる永遠のいのちを与えられることであります。

主イエスの死と復活の中に

イエス・キリストは、多くの病人をいやし、死

者を復活させる力をさえ示されました（マタイ9:25、ルカ7:15、ヨハネ11:44）。しかもご自分は、敵の手にかかって苦しみを受け、十字架にかけられ、人々のあざけりにも関わらず自ら十字架から下りてくることなく、屈辱的な刑死をとげ、墓に葬られてしまいました。けれども、主の死は輝かしい復活の勝利につながるものでした。主ご自身が死の中にとどめおかれず、復活されたというだけではありません。眠っている者の初穂として、すべての人の復活のさきがけとなり、道を開いてくださったのです（1コリント15:20）。「わたしは復活であり、命である」（ヨハネ11:25）と言われた主は、人の罪の贖い^{あがな}として死なれただけでなく、その死によって死を滅ぼし、私たちが永遠のいのちに至ることができるようにしてくださいました。私たちは自分自身を、この主の死と復活にかさねて見なくてはなりません（2コリント5:14, 15）。

復活の望み

死は私たちの終わりではなく、み国において主と共に、復活のいのちを生きる望みを、私たちは与えられています。聖書は「人間にはただ一度死ぬことと、その後裁きを受けることが定まっている」（ヘブライ9:27）と言います。しかし、主を信じる者にとっては、「死んだのち裁きを受ける」ことは、むしろ救いの完成です。主のいのちにつらなる復活のいのちを生きることが許されます。この人たちには、もはや死はなく、悲しみも嘆きも労苦もありません（黙示録21:4）。

復活は、肉体が減んでも霊魂だけはどこかに生きていうことを教えるものではありません。死は完全な滅びであり、現実的なもので

す。しかし、この完全な滅びの中から、神は私
たちをよみがえらせてくださいます。それは地
上のもとのからだの回復ではなくて、新しい創
造によるものです。完全な死を通りながら、私
が私として復活させられます。イエスの死と復
活は、このような私たちの望みの保証であり、
初穂であります。

将来の望みと今

イエス・キリストによる復活のいのちは、私
たちが将来いつの日か死んで、またいくばくか
の時がたって、終わりの日になり、復活するこ
とができるという、私たちが考えやすい予定表
を超えています。マルタは、兄弟ラザロが亡く
なったとき、そのように、終わりの日の復活の
時に復活することを考えていました（ヨハネ
11:24）。ところが主は、そのような予定表を超
えた仕方です。「わたしを信じる者は死んでも生き
る」と言われました。私たちがキリストと共に
死に、共に復活するのは、すでに現在のことと
してあることを、パウロも示しています（ロー
マ6:3-8, エフェソ2:6）。神のみ国のあり方と、
私たちの時間空間の尺度とが、どのようにかか
わり合い、釣り合っているのか私たちには分か
りません。しかし確かに、永遠のいのちにつら
なるいのちが、信仰によって今始められます。

天国の到来

私たちが歳をとったら天国に近づいたとい
うのも、よいことをすれば天国へと進んでゆけ
るということでもありません。ましてだれでも死
んだら「天国行き」だというわけではありません。
天国は神さまのおられるところ、その支配
したもうところす。永遠のいのちが現在の生

に関わるように、今の生活の中でも、もし神さまのみ旨が私を支配しているなら、そこには天国があるといえます。

もちろん、今私たちが味わい得る天国は、完成のみ国とは違います。そして本来のみ国については、聖書はあまり詳しい具体的なことを語ってくれません。おそらく私たちの体験や言葉では言い表すことが難しいからでしょう。けれども、主が復活について教えられたとき、天にあって人々が再会することができ、しかも天使のような存在であることをお示しになりました(マタイ22:30)。黙示録の終わりもその輝かしい状態を象徴的に示しています。

永遠のいのちを 生きる

天の国あるいは神の国と同じような意味で、ことにヨハネが多く使っている「永遠の生命」も、ただいつまでも続く退屈ないのちという意味ではありません。「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたがお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」(ヨハネ17:3)と、イエスは最後の祈りの中で言われました。肉体的いのちそのものも、私たちはそれがどこにあるか知りませんが、生きているかどうかは、その人が活動し、成長しており、触れれば温かいことですぐ分かります。新しいいのちも同じです。ヨハネは「兄弟を愛している」ということによって死からいのちへ移ったことが分かると言います(1ヨハネ3:14)。み子を信じる者には、主ご自身が永遠のいのちを約束してくださいました。私たちは、この主によって、永遠のいのちを今から、生きはじめるのです。

※聖書は、いわゆる死後のいのちについて、結局どういふことを教えているのでしょうか。

著者 石居正己(いしい まさみ)

略歴 1928年福岡県に生まれる
日本ルーテル神学校卒業。フィラデルフィア・ルーテル神学校、
ルター神学校(セントポール)留学。
日本福音ルーテル箱崎・武蔵野・蒲田教会他で牧会。
日本ルーテル神学大学・組織神学教授
現在・ルーテル学院大学名誉教授

著書 「創世記」講解、「教会の歴史と系譜」、「ルターの信仰に生きる」
(共著)、「イエスのまえとうしろ」他多数。

訳者 ピノマ「ルター神学概論」、「ルターの祈り」(編・訳)、「ルター
著作集」(2. 5. 9. 10巻)、他多数。

キリスト教信仰へのガイド

～愛と恐れと信頼と～

1998年7月20日発行

著者 石居 正己

発行所 日本福音ルーテル教会・西教区伝道・教育部

発行者 立野 泰博・松本 義宣

住所 〒730-0045

広島市中区鶴見町2-12 ルーテル平和大通りビル内

TEL (082) 241-3695 FAX (082) 241-3715

印刷 合資会社 ダイトウ製版

